花の請集

附同情錄

春の庭を鶯の来て鳴くと下る

法師の面の花ちるあゝ面

門脇文庫

花外詩集

一此書、昨十月金尾文淵堂より發行の筈なりしも、荏苒今日に至れり、今度同店主と協議の上、自ら出版するをとせり。

二、曩に發賣を禁止せられたる吾が『社會主義詩集』中の詩は、本集には半篇だも收めず。

三本書の編輯に、畏友角田浩々歌客、三宅操山両君に負ふ所多し、茲に感謝の意を表す。

花外詩集目次

	頁
波濤を望みて	一
鰈賣娘	四
平民の屍	六
斷腸	九
故園	一〇
英雄の碑	一五
白菊に	一八
雲に與ふ	二一
朝顔に對して	二三
葡萄酒	二五

暮　鴉……二六
詩人の世……二八
友に返す……二九
紅　葉……三一
月と吾と……三三
海　濤……三四
山茶花……三六
夕　陽……三七
闇中田鼠に告ぐる歌……三八
螢を放ちやりて……四六
菫と別るゝ歌……五三
花と人生……五八

戀しの雲……六〇
血、涙、心……六二
雨　雲……六四
馬上哀吟……六六
『長劍短刀』序詩……六九
健　腕……七〇
梅　花……七四
山上感吟……七五

花外詩集

波濤を望みて

秋空、雲の飛ぶ如く
孤身飄々さすらひて
波は遠鳴る和歌山の

兒玉花外作

城の天主の下にして
露地にわれは倒れけり。

枯葉隱れになく鳥の
うたは挽歌と聞かれつゝ、
大樹どよもし頻々と
風は、土にぞひれ伏せる
頭のうへを吹き過ぐる。

嵐の中に聲あるか
頭擡ぐる西の方
紀の川下は海原や、

遙かに高く白浪の
雪にも似たり逆捲ける。

沈みし心にはかにも
波の如くに昂まりぬ、
腐れし社會には鹽となり
注がむかなや、わが魂は
世を覆へす力得ぬ。

嗚呼、荒漠の海にして
「自然」の情と敎へあり、
さはれ、自由の洪濤を

揚げて進まむ、愛を地に
ああ滔天のきはみまで。

鰈賣娘

鰈は買はずや、鰈めせや、
解かば幾尺、黒髪の
上にひらたき桶載せて、
鰈は買はずや、鰈めせや、
聲も朗らにたをや女が
露を蹈み〳〵呼ふなり。

見よや新鮮のこの魚を
鰈は死にけり此の朝け、
市の貴人、かはざらば
妾も死せん貧しさに、
鰈は買はずや、鰈めせや、
味美き魚よ、青海の。

唯に一つの魚だにも
浦の若人、わが父の
一葉の舟に海の上
波に命を懸けて獲ぬ、
鰈は買はずや、鰈めせや、

命の味はいと安價し。

平民の屍

眞紅の鐵のさむる如
わが胸、熱の冷えば今
屍は地に與へてん、
さらばよ、友よ手をとりて
永久の別れを告げんかな。

赤酒盛られし空甕
血汐しぼりしなきがらは

元の土へとかへさまし、
浮世の塵や雨に風
噫、衰へし骨捨てむ。

わが靈魂は天つ國
甘き平和、願ぎもせド、
現世にます苦痛と
暗黑の陰府も厭はしゝ、
宇宙の間よわが魂は。

はかなく卑き小草さへ
種を殘して枯るものを、

天地の中に留めたる
魂は自由の氣となりて
光の如く磅礴ればや。

土に生れし白雲の
空に上りて動くごと
世へは注がむ、自由の氣、
雲や消ぬとも、あゝ人の
胸より出でし精神きゆべき。

斷腸

雪の小窓に梭の音、
涙に機を織るならむ
いかにその唄哀しきや、
今しも聲の止みにしは
糸や切れたる、嫉まれて
尺の白絹斷たれけん
胸、さわがするけはいあり。

冷たき世にて詩人が
涙と血とを經となし

緯には愛の一卷の
その詩はなりて破られけり、
糸のきれしは繋ぐべし、
噫、斷腸の詩の恨み
憂ひを知るや機織女。

故園

殘んの光華やかに
紅き夕陽の沈む時、
熱き額を地にたれて
はるゝ洛に入りみれば

古鄕の秋は暮るゝかな。
泪しき目にも懷かしゝ
愛宕の山や、比叡山
狹霧に腰を纏はせて
昔ながらの平和の
姿を天に聳ゆなり。

湧き出る水の清ければ
こゝなる女肌白う
みやびの男優しくも
情は薄し、衣飾り

往き來ふ人の面識ちゞ。

名所々々は如何ならん、
獨は大厦いや榮え
物質みなこゝに輝けど
ああ美と善のうちつれて
去りにし跡ぞ嘆かるゝ。

空も愁に曇るらむ、
疵もつ胸に泌みぬとも
故園の風のうれしさよ、
涙に似たるふるさとの

雨に濡るゝもおもしろや。

流るゝ水や、行く雲や
さすが穩しの山城や、
世にさすらひの非運兒の
ひまなき足に比ぶれば
動ぐともなきそがさまや。

夏は綠のしたゝりし
御苑の杜の蔭ゆけば、
塀につどふ夕鳥の
吾に謳ふにあらなくも

歡迎の歌と聞かれつゝ。

秋の木の葉の散るが如
一家哀しき別れより
われに古巣はあらねども、
元の「自然」を宿とせば
今宵の夢やゝすからん。

秋も靜けき平安に
初めて戀の思あり、
鐘の響や、星の色、
青き光の月かげに

疲れし胸をいやさまし。

嗚呼、流落に飽きし身の
明日は都を立出でゝ
また憂きことの堪へがたな、
母の墳墓の側に
永久の膝にぞ倚りて眠らむ。

英雄の碑

大阪中之島公園に木村長門守重成の碑あり、吾れ偶々此の處を過ぎり、碑の龜裂せるを見慨然この作あり。

秋の夕の中之島
風は蕭々衣吹く、
「木村重成表忠」と
深く彫られて日に光る
石碑を仰ぎ佇めば、
無量感慨、わが胸に
泉の如く湧き出づる。

橋を隔てゝ東に
昔、豪奢の夢の跡
大阪城に對ひては
石も無念や感づちむ

見よや二つに胸裂くる、
嗚呼、衰亡の社會みて
人の胸さへ冷ゆる世に。

元和元年、重成は
青春てゝに二十三、
頭髪には伽羅の名香を
薫ゞて奮ひ戰ひぬ、
今ぞ明治の若人や
俗火、頭に燃しつゝ
名利の爲めに鬪へり。

あはれ、綠髪紅顏の
義により死せし美少年、
勇と趣味ある英雄の
何時かわが世に現はれん、
歷史の流、淀の水
還らぬ君の碑の前に
熱き涙を灑ぐかな。

白菊に

路傍にたてる夏菊の
露にかわくぞ憐れなる、

空なる母が小菊には
夜の間に露をおき忘れ、
夕まちえぬ姿かな。

蝶花鳥に生命なる
泉掬まむも遠ければ、
せめて涙にうるほさむ、
身は賤しくて貧しくも
涙に富める吾れなるを。

否よ白菊、悲哀の
人の泪の落ちもせば、

あへなく花や凋むべし、
平和あふるおほ天の
露に育てる花なるを。

あはれ、優しく美はしく
清きいましに幸あれや、
劍の道に行きくれて
ひとりかはける吾が魂は
人の涙の露に消ぬべし。

雲に與ふ

限りもあらぬ青空に、
雨とならむの力なく
迷へる孤雲よ、いと高き
白き翼よ、大空に
影を潜むる巣やあらぬ。

鳥の小きは鷦鷯
その巣に似たる山々も
天の驕兒を容れざらば

雲よ、來ずやは吾胸に、
人のはかなき胸といへ。

花や泉や明けれど、
深き憂愁と悲哀の
晴れまもあらぬかのが胸、
雲よ、このまば低くとも
心の空に宿れかし。

あゝ人間なれば消ゆるなき
塵のうれひを拂ひてぞ
雲よ、抱けよ永久に、

いづれ小暗き胸ならば
天なる雲に蔽はれむ。

朝顔に對して

（わが詩集の發賣禁止の翌朝）

昨夜、悲憤に寢もやらず
凭るゝ窓の下白う
朝顔さけり美はしく、
花も自由に開くもの
人の思想の何ゆゑに
殘忍の手に破はれし、

吁、戰場を樂園とかへ
花を咲せむ心をば。

朝日を碎き、潮を堰き、
雲も消すべき術あらば
世紀を越えて勃興りたる
かの新思想壓すべし、
涙に濕し人々の
蒔きに蒔くなる愛の種子
失せず、滅びず、華開き
平和の世界とはなりぬべし。

葡萄酒

親しき京の友よりぞ
送りし文のかたはらに
「富士は眞白よ、裾野には
七草咲くや、雪や降る
甲斐はよき國君住みて
葡萄の甘き酒を酌み
樂しく秋の月日見る」

綠葉、雲と柵引きて
峽は葡萄によき處、

人の情の冷たさに
苦き涙をわれは飲み
深き悲しき味に醉ふ、
葡萄は美酒と釀されて
山を出づれど、何時かまた
吾は還らん友があたりへ。

暮鴉

夕燒紅し西の空、
岡に登りて見渡せば
彼方、綠の森の上に
千羽の鴉むれて舞ふ。
沈める心いつしかに
翔り行きけり脫けいでゝ
天津み國に遊ぶ如
靜けく舞ひぬ輪につれて。
光をさめ日はいりぬ、
鴉は森に隱れつゝ、
獨り淋しく遲々として
心は再び胸の中に。

詩人の世

空は青しや、起きみれば
一葉は落ちぬ、庭の面
天下の秋をこゝに知る、
霜置き、風の吹くなへに
木々の枯葉は散りうせて
淋しさいとゞまさるなり。

威武の無殘の夜嵐に
涙露けき一片の
詩書、落ちて破られけり、

蹈まるもよしや、常久に
詩人は多し、詩の天下
愛の花咲く春と知れ。

友に返す

盟へる友の箱根より
恙なきやと問ひていふ
「富士の高嶺に雪降りて
銀の冠を載けり、
甲斐にぞ去年は君住みて
胸裂く悲憤なかりけむ」

峡と聞くから山戀し、
秋も花咲き草は枯れ
風の寒くぞ吹くまゝに
烈しく積る富士の雪、
小さき身にも迫害の
いよゝ嵐とまさるらん。

友よ安かれ、朝夕の
富士の教は今にあり、
意氣はいよ〳〵昂うして
吾れ世に立てり、主義の爲め、

吁、白雪の消ゆるとて
いつかは消えむ深き怨恨の。

紅葉

嗚呼、秋山の愛でたけれ、
立田の姫の指さきの
血潮に木の葉染めなさば、
山は一夜に革り
濃き紅のから錦、
鹿もたのしき音に啼きて
紅葉に照されて通ふらん。

ますらたけをの胸の血を
虹のごとくに灑ぐ時、
涙の谷に住む人も
人ことごとく錦着む、
こゝにわが世は光榮の
日をば載き春長う
樂しみ、歌と盡くるなし。

月と吾と

小夜は更けたり、月みれば
つきも吾身を照らし見る、
月はみ空に、われはしも
荊棘の地にさまよへり、
めぐり逢瀬のあらなくも。

古郷いでゝ、甲峽の
葡萄を染むる露に涕き、
福井の雪に泣きしとき、
人の面より親しみし

月よ、わが影いつまでか。

永久の月影、消ゆる命、
あまり戀しさ、はかなさに
月を抱いて走らばや、
暗黑をこのむ人の世は
光明奪ふも惜まじな。

海濤

四海兄弟たらしめよ
正義、平等、博愛の

世界の思潮堰きえんや、
自由の風を止むべくば
津々浦々の岸に立ち
双手を擴げ拒がずや、
慈悲の涙の雨雲も。

波に乘りてぞ寄り來るは
たゞ水禽にあらじかし
噫、大勢を如何にせん、
平和の歌を忌むべくば
鷗の喉も絞殺るべし、
烈しき苦言このまずば

濤、鎮まれと壓せよかし。

山茶花

空や悲しき夢みけむ
降りてはれたる冬の雨、
雲間をいでし月かげを
うけて光るは山茶花や、
草にすがれる蝶の如
身を顫はせぬ、をのゝぎて。
木蔭に倚りて吾れ泣きぬ

「神よ、わが世にきずづきし
靈魂をぞとれや、美はしの
花の命を保てかし」
祈る頸に一重
花の涙のかゝりけり。

夕陽

いつか理想界に大阪の
入日の空を仰ぐ時、
天保の世に憤慨の
火をば起して燃え亡せし

彼の大盤を思ふかな、
光りて出でし太陽を見よや
輝き山に沈むなり、
主義の炎と燃え立たば
主義と共にぞ死せむのみ。

闇中田鼠に告ぐる歌

晝來し墓地の側の
畠につきし一筋の
田鼠の跡をとひみれば
夜風は枯れし草吹きて

魂魄さそふ響あり、
月は缺ぐれどわが胸の
あふるゝばかり悲哀を
泄さんよしもありやとて
梟啼ける森もぬけ
さみしき野路たゞひとり、

終日闇に棲む友よ、
生れて人の毒の矢に
心の眼傷きし
人ぞ、青菜のそよとだに

聽かずや、あはれ土の下、
人と獸のけぢめあれ
同ト非運のわが儔よ、
饑ゑし鼠の厨にて
板を穿たむそれならで
力の限り堀りしよな、

それも光を見んためか、
頭の上の輝きは
汝に似たる醜しき
衣まとへる農夫の

振りあぐ鍬のひかりなり、
やめよ、益なき企計の
身をば亡ぼすわざぞかし、
吾も幾歳もとめしに
天の惠みやあらざりし
たゞ欺かる幼童のみ、

いかに荒れしよ、冬の野邊、
木の葉を家の生物は
霜と嵐に苦しめり、
雪の筵とかはりなば

小鳥や餌に悲しまむ、

さらば安かれ慮なし、
造化にへだてやあらなくに
人のさだめに一片の
土塊だにもなき人に
比べば富めり、むぐらもち、

よしや生れて卑しくも、
香もなき泥も饒なり、
貧しき人に一粒の
米も汗なる眞珠なり

價なくして得られんや、

人と人との血に塗れ
嫉妬、鬪爭、わづらひの
塵の地上をおもひみよ、
さても靜けき土の中
天上の福にぞしかねども、

都も鄙も腐敗れたり、
惡魔の如くわが息を
なれに吹かなん願くは
族と共に、呪はれし

人住む家の底をほれ、
是れぞ空しき夢ぞかし、
死こそ一切のおはりなれ
汝のすぎし道のごと
人や喘ぎて行く終極は
たゞ一すぢの墳墓のみ、
物影なきを窺ひて
田鼠や穴を出でもせん
人や一たび埋れては
またも見ざらむ現世を

元の土へと歸るらん、
弱き小さき獸とて
光はなくもふさはしき
處あたへし神に謝せ、
情も氷る寒き世に
吾れ放たれて恨みあり、
明朝は勤しむ農夫の
來らばこゝにつぶやかむ、
消してかへらめいざゝらば
春は花咲き照すとも

姿あらはすことなかれ。

螢を放ちやりて

螢は行きぬ光りつゝ、
螢は去りぬ音も無う、
罪を殲悔ひたるいと若き
女囚牢舎を出づに似て
夜半にひそかに放ちけり、
冷たき室の燈火の
やゝに消えゆき唯一つ

殘る火花の散る思
はかなき虫の悲しさに
涙の目もて見送りぬ、

闇を慕ひて飛ぶさまよ、
暗黒き時世に勢力ある
奸雄のごとく舞へるかな、
明日の運命を知らぬ身の
樂しげなるぞ憫れなる、

夕、逍遙の歸るさに
橋の上にし佇めば

流るゝ水のほの黒う
かすかに白き石垣の
草に光るは汝なりき、

自然の性のまゝなれど
照して何のかひもなう
やさしき影の姿をぞ
命は薄き紙片に
包みてあはれ吾家に、

時は來りぬ、今はとて
懼れもあらず盜賊も

仇の童も夢枕
無心の境ぞ、羽ふりて
心のまゝに遊べかし、

晝は疲れし足をひき
犬にもしかぬ乞丐らも
安き眠の中にあり、
心飢ゑたる吾はしも
睡眠の富も多からず、

木の巢に露は珠の如
往かば吸はむにまかせたり、

地の上たかく迷ふとて
星に望みをかく勿れ
とても叶はぬ願ひなり、

弱き小虫を殺す兒も
むごき運命に捕はれむ、
斷頭臺の刄より
鋭き「死」の手くだり來ば
同じく脆き花と花、

顔容美はしき啞娘
聲なき身こそ恨みなれ

汝よ小さき鳥ならば
いかに哀しく歌ふらむ
詩人ならば如何ならん、

ゆふべ涼しく籠に閉ぢ
風鈴椽に鳴るところ、
賞づる市人、天地は
苦痛、煩悶、狂亂の
嵐騒げる檻ぞかし、

行燈めぐる灯蛾
これは光を戀ひて死す、

闇の女王よ汝が領に
今夜ばかりも輝けよ
清き遊びのよからずや、

書よむ窓の戸をあけて
涙の目もて放つごと
天の戸ひらき大神よ
渾沌の世の創りに
人の魂はなつ時、

蛇には蛇の氣もあれや、
人に靈を與へたる

神よ、惠もありもせば
肉の重荷の永久に
人やかばかり迷はざらドを。

堇と別るゝ歌

夕暮ヒゝと啼く鹿の
齒より漏れけむ青き葉の
流れて下る一葉舟
見送りがちに谿河に
そひつゝ上る山の路、

朝日の光あざやかに
枝うちかはす樹をもれて
鳴くや百鳥樂しげに
あしたの歌を唱ふなり
吾は思ひに沈みつゝ、

いとも悲しき人生の
旅路あゆみし若人の
その初戀に遇へる如
露にぬれたる一むれの
菫みしこそ嬉しけれ、

山の香たかくにほひきて
木の葉に見ゆる風吹かば
濃き紫の愛らしき
眼をもてる花と花
呟きあひぬ傾きて、

優しき花に向ひては
かたくなりし吾心
愁ひは消えぬ、ながめては
また新たなる悲哀の
湧きこそいづれわが胸に、

さみしき孤獨たのしみて
人の面わの厭はしう
世の冷たさに堪へかぬる
吾は汝の友たらん
終日山に登り來て、

人とうまれて幸薄う
泣きて世を經る宿命かや、
苦痛の形もたむより
せめて花とも生ひもせば、
思へば神も恨みなり、

曉に開きて夕には
萎むもよしや美はしき
命なりけり、やよ菫
獸の足に蹈まるとて
春の子なりし、短かくも、

平和の小き世界とはこれ
仲間と容れまド花の輪に、
願ふはゆるせ一もとを
所狹くともわが庭に
移し植ゑては慰まん、

否とよ菫、けがれたる
衢の塵ぞいたはしき、
他なる草の花つまば
憂しや捨てんの恐れあり、
日影よ、覗射しそ泣きて別れむ。

花と人生

あはれ浮世に泣く人よ
自然に咲ける花に問へ、
露は涙にあらずかし
なみだといへば大神の

惠みよろこぶ泪なり、
嵐と霜にいたむとも
身の麗はしさ、優しさを
示すが花のこゝろかな、
枯れたるあとのふり見るも
げに煩悶のしるしなし。

土よりいでし人ながら
花にはあらで、蝶鳥の
西に東に定めなき
人よ、自然に生ひ立たば
人の正しき道を踏め、

まことわが世はいくさなり
あしき運命とたゝかひて
涙の眼とづる時
花の如くにかこちなく
あゝ美はしき死を遂げよ。

戀しの雲

髪こそみえね、顔みえね
雲の少女の戀しさよ、
かひなき人の手を伸べて
嗚呼いくたびか、雲の裳

捉へんとては仰ぎけむ。
いかにあやしき吾が心、
地に息する人よりも
空の乙女に戀すとは、
姿かはれど自由なる
氣高き雲の美はしや。
黄金、權威の跋扈する
暗黒く穢れし土蹴りて
無限の天に登りたや、
あゝ風となり雨となる

雲と下界に臨みたや。

家をも知らね、縹緲と
行衛定めぬ雲慕ふ
世にもはかなき戀やこれ、
雲を思ひしその日より
心は天にうつゝなり。

血、涙、心

ラインの岸にあらねども
甲斐は葡萄の産地なり、

釀せる赤き葡萄酒の
芳香りて價貴くも、
こゝなる人の血や卑し
空なる瓶か血はあらじ。

山を穿てば水晶の
きよき明らの石あるも、
胸の心に光なし、
富士の裾野に白露の
乾くひまとてあらねども、
こゝなる人に泪なし。

嗚呼、甲斐のみか、美しき
日本島根に今はしも
清き心と涙なし、
杜鵑、千古に血を吐くも
薔薇や花は紅くとも、
人に血なきぞ憾みなる。

雨雲

夏の夕陽の華やかに、
西のみ空に漠々と
いま雨雲の起りけり、

地に心も渇き伏す
吾は双手に雲を呼ぶ、
鳥の翼をあぐる如。

雲に腕を捲きつけて
空翔ちんと思ふかな、
激しく雨のおつるたび
われや濺がむ、血と涙
憎きに血をば、哀れには
泪流さむ瀧のごと。

飛ぶに羽なき身ながらも

狂ふばかりに祈るなり。
雲のはかなく消えん時
吾もきえなむ、もろ共に、
涙と血をば吐き盡し
死ぬる運命のわれなれば。

馬上哀吟

重き愁の身をのせて
馬の歩みの遲きかな、
桔梗、小萩は咲き亂れ
露にたふるゝ女郎花、

鶉啼くてふ野を過ぎて、
その名も高き信濃なる
淺間の山に來りけり。
こゝ秋風の蕭條と
麓を迴る旅人吹き、
松のみ多しこのあたり。

仰ぎ見すれば、空ぎはに
淺間の山の吐く煙、
鳥は迷はず、木は生ひず、
いきたる物の影も無く
高く聳えて、遠く延ぶ。

山の威靈におのづから
首くだれば、わが袖と
馬の鬣、灰白し
夕陽をよけて進みゆく
まごの笠にも積るかな。

壯なるかな永劫に
天に炎をあぐる山、
小さき胸に火は燃えて
われも天地に怨みあり、
人の思想を壓するなる
世をば燒かむか、憤恨の

火にて燃果えむかおのが身は
寧ろみ山よ、もろ共に
裂けてくだけて冷えんかな、
呪咀の世にぞ吾は歸らじ。

『長劍短刀』序詩

世界の救主耶蘇曰へり
「我はこの世に劍をば
出さむ爲に來れり」と
友よ、長劍短刀を
世には出すは何の爲め、

君に寄するの希望あり。

右手に正義の劍を把り、
左手、眞理の刀握り
世の荊棘を拓くべし、
愛と平和の理想境
進みゆく〳〵血にあらで
流すは君よ涙なり。

健腕

男子生れて世に立たば、

雪の中なる寒梅の
枝をみ空に向くるごと、
け高き姿、清き香を
さみしき庭に放つごと
世には思想をみたしめよ。

炎絶えせぬ工場に、
太き腕が弛みなく
機械の鐵輪まはすごと、
熱火烈しき世の中に
鐵より堅き腕により
正しき業をはげむべし。

男子一たび事取らば、
黒雲、雷雨注ぎかけ
腕の上にたばしるも、
山より頽雪落しきて
双手の上にかゝるとも、
忍びて捨つること勿れ。

生命の朝、死の夕、
樂しき春や、憂き秋も
正義、眞理に健腕を
振ひて進め、世の道を、

孤兒に寡婦や、草花の
涙をさへや拭ひつゝ。

大天地を創造りしは
神の御手なるわざと聞く、
吾等はかなき人なるも
罪に汚れぬ腕により
おのが天地を世にのこし
自然の露と消えんかな。

梅花

嗚呼、北國の冬深し、
名知らぬ山に雪白く
雲の彼方か故郷は、
流離になれし身ながらも
目に觸るものぞ淋しくて
啼きて胸痛す寒苦鳥、
命も衣もいと薄き
袖に涙の氷るかな。

人の心や冷固けれど、

春に先だち梅の花
咲きて佳人の微笑の如、
人の言の葉異なれど
清き香ひぞ懷かしや。
あゝ土のあるところ
花やなからむ何處にか
慰藉なからむ人生に。

山上感吟

袖の觸るのみ白雲と
共に登りて比叡山、

吾いま立てり頂に、
京の市街を見渡せば
烟霞さかむにたなびける。
雨には打たれ、露霜に
濡れて久しき大石を
撫づれば怪し、將門の
腰うちかけし石やこれ
影か、怨恨か、胸を射る。
王者望みて、吁空し、
卑しき野心、功名の

遂げぬたとへは、瀧つ瀬や
溪河水のたぎつとも
消ゆるに似たり、泡沫と。
高き山にて基督が、
世界の國とその榮華
輝くさまを見てし時、
王冠、快樂—試みの
惡魔叱しぬ、權威もて。
晃、得んとて將門や
首を失ひ、基督は

金冠ぞ弊履と捨てしかど、
人の心の王國に
笏をば把れり限りなく。

家あるところ、悲哀と
消ゆるときなき塵の中、
今も小なる將門が
名利のために狂ひつゝ
戰ふさまぞ目にぞ見ゆ。

春風寒き山巓に、
俯仰感慨、世を忘れ

ユダヤの義人しのぶれば、
思は高くはた清く
吾とも知らず偉大なり。

同情錄

同情者諸君に

花外

人の同情(なさけ)をおもほへば
涙、涕沱と止まら寸。

堅く冷たき巖(いはほ)より
水さへ湧くを、わが泪
あふれ〳〵て涙河
落ちて分れて西東
有情(うじやう)の人の方に流れね。

葉の露拂ふ秋風の
中に淋しく佇めば、
月、天心にのぼりつゝ、
神の惠みか溢れたる
光の海を仰ぐかな。

闇より闇に葬られ
逝きし詩歌(しうか)てふ兒の爲に
頭を低(た)れてつく〴〵と

わが『社會主義詩集』の奇禍を買ふや、諸方より慰問奬勵の詞を給ひ、多大なる同情を寄せられたるを以て小生感激措く能はず、即ち厄災を蒙りたる書肆文淵堂主人に贈るの拙詩篇と、夫れに併せ與ふる趣旨にて諸先輩及び詞友に同情所見を求めんが爲め書翰を呈せしに、諸方より義氣同情の聚まるところ、此の一卷を作せり。

同情錄諸家

（いろは順）

岩野泡鳴君　河井醉茗君　草村北星君　木下尙江君
磯野秋渚君　片山潛君　柳内蝦州君　木崎好尙君
生田葵山君　幸德秋水君　山本露葉君　溝口白羊君
石橋白羊君　角田浩々歌客君　前田林外君　三宅操山君
原田公孫樹下仙君　甲斐一郎君　松崎天民君　三木天遊君
原戍吉君　吉田笠雨君　正岡藝陽君　島田宇宙庵君
西川光二郎君　高尾楓蔭君　劔南道士君　平尾不孤君
本多雪堂君　高安月郊君　後藤宙外君　平野柏蔭君
鳥居素川君　高須梅溪君　小塚空谷君　平木白星君
德田秋聲君　坪内孤景君　安部磯雄君　薄田泣菫君
尾池狂民君　綱島梁川君　青柳有美君　鈴木皷村君
小川煙村君　中村諦梁君　赤司繁太郎君
小栗風葉君　中村春雨君　齋藤溪舟君
大谷繞石君　中島孤島君　佐治實然君
大町桂月君　梅澤和軒君　坂井犀水君
奥村梅皐君　黑田湖山君　堺枯川君

岩野泡鳴

○

拜呈、新聞紙並に御手紙の趣に依れば、貴著社會主義詩集御出版の處、端なくも其筋の忌諱に觸れ、治安に害ありとの旨を以て、發賣禁止の厄を蒙り被成候由。若し其場所が東京ならば、多分、何の事もなくして濟み候ものを、大阪は、兎角、文士の爲めには、要領を得ぬところと、遺憾に奉存候。且、御集にして、世の勞働者の友とならんには、國詩讀者の範圍も廣まり行くものを、これ又遺憾に奉存候。然し、かゝる事件は、却て人の心を奮起せしむるものなれば、益々その主義の爲めには盡し可被成候。ラスキンの如きも、大に社會主義の人なりし由。小生の如きは、現世主義、感情主義、直觀主義とは申し得候へども、いまだこの主義とは名のり兼候ところも有之、いづれ御面會

の節、高説承り申度候、拜復

九月廿八日

贈詩

奉贈

兒玉君花外

讀書憂患始、此語果如何、放浪江湖客、詩襟涕淚多。
富貴冷灰三嘆、文章奇禍一時、筆舌依然無恙、乾坤鎭是有知。
意氣不遭凡俗侵、醒猶訣宕醉長唫、風雲兒女忽然變、一卷新詩天地心。

癸卯九月念八夜于碧雲山房青燈下秋渚磯野惟秋拜手艸

磯野秋渚

○

生田葵

御手紙に接し驚き入り申候貴詩の世に出んを指折數へ待ち、產れなば、懷に抱き、頰磨りし、我等村住居の身には、之のみ快樂なる、夕暮の靜かなる杜陰に、さては水車響く小川の緣に、微吟興を遣らんと思ひしに、偖ても無情の世よ、何とて斯くは酷き鞭韃を下す、恨みは大兄及び我等のみか、窓に倚りて暮れ行く空に故鄕を憶ふ工女、額に汗して鐵槌握る勇ましき國民と、勞働を正しき事と思惟し、溫情を尊き者と知る輩は一樣にと思ひ申候。兄と我とは同ド國所の產れ、同ド山河を見、同ド土に湧く水に衣を濯がして生立ち候もの、兄の美くしき詩想の依て有る所も知り候樣に覺え申候、空の星、地の泉を單に讃美し唱はんには、兄の血は余りに熱きに過ぎ申候、若かド人世の苦患——近世文明の欠陷とも云ふ可き勞働と生活の權衡を

得ぬ苦痛の聲に耳を貸し、冬の朝橋上の霜を踏んで往來する憐なる少女、終日營々とし業を勵み、而も妻子を養ふ事を得ざる國民に、温き慰籍を寄せられし、之れ兄の心に候。然れば彼等道行く富人を見て、暗涙を催うし、星の大空を見上げて我等何ぞ斯く薄倖なると、世を憤り、天を恨むの念。總て弱者の胸に宿る念は、兄の心の琴線に觸れて此處に奏で出でられしもの兄の詩に候。彼等勞働者、手に腕に力あるも、さとき富人の如く口云ふ事能はず、毒ある蛇の人を叱かす巧妙なる術を知らぬもの、兄は將に彼等に代つて、彼等の云はんとして云ひ能はざる所を、叫ばれしものに外ならず、其の社會主義の詩と云はれしは、只近時此の語能く資本家の心膽を驚かすよりの便宜ならんと思ひ申候

資本家を驚かさんと仕給ひし兄は、あらぬ方より桎梏を受け給ひぬ、不幸は此の上も無かる可きも、偖ても我が國文物の制度何ぞ詩に對して狹隘

なる、我等は殆んど解するに苦しみ申候、過ぐる年讃洲高松に商品陳列會のありし時、一米商の其の出品に彼の佛蘭西博覽會の賞狀を名譽の紀念として、石版刷にして貼付せしに誰人も知る如く其の中に天使の描きありしかば、之れも裸体なりとて其の上に白紙を蔽はしめし奇話之れ有り候。我國文運の不統一なる時代、かゝる事は珍らしからぬ事、貴兄も厄災と御呆めらるゝ方よろしからんと存ず候。只我等は雄辨の沈默を守る可く、時代は驕て彼等をして、彼等自身にて日本國の文明に汚点を印せしを心附かしむ可くと存ず候頓首

『社會主義詩集』の夭折を悼む

石橋白羊

花外兒玉君、其室金尾氏との間に、玉の如き男子を擧げ、其名を『社會主義

詩集』と呼びて、鍾愛限りなく、往く末は、世の哀れなる貧者、弱者の友となりて、之を慰め、之を救ふ、天晴の仁人義士たらしめんとて、樂しみ育てし甲斐もなく、まだ浮世の風に多くも觸れざるまに、哀れ露と消えて此世を去りぬ。

父母の歎き譬へんに物なし。我等其子の生れしと聞きつるのみ、唯一と目愛らしき、賴もしき顏ばせをだに見ざりしを、最と惜しく思へるに、まして生みの母となり、父となれる人の心の中、げにも左こそと、思ひやらる。

傳へ聞く、其子の夭折は、自然の命數にてはあらざりけるを、眞は檢疫法の規定によりて、官醫の診察に任かせけるに、善くも察はせで、直ちに避病院に送りたるなりとぞ。庸醫の怖るべきは、虎よりも甚し。

ト者あり、說をなして曰く、其子の薄命は、元と其名に宿れり、努め其過ちを再びせそと。我頗る其意を諒とす。因りて父母に告ぐるに、過ぎし悲しみは

悔ゆとも復ちず、聽て又設けたまはん、第二の愛兒には、心して其名を擇びたまはんことを、以てせんと欲す。

愚なる消防夫

公仙生

頃日花外兒玉君に依て爲されたる靈妙なる社會主義の一點火は、今や將に燃え揚らんとする一刹那、あはれ政府てふ愚なる消防夫の爲に安全網もて掩はれたりき、愚なる消防夫は蓋し其危險ならざるものをも尙危險として之を慮りたればならん、されど是れ實は賴みもせぬに餘計なる御セッカイにてありき、君の之を以て大に憤る亦大に所以なきに非る也。

されど君憂ふる事を休めよ、彼等は只纔かに火を掩ひたるのみ未だ火をすら消滅し得ざればなり、而も可燃性の人てふ油は恰も湧き出づる泉の

それの如く千古に盡きざればなり、愚なる消防夫はたとへ只纔かに安全網もて之を掩ひたりとするも、其油の續く限り火の續く限り頓て安全網を燬き盡くす時は靈妙なる社會主義の火は條忽として焰を上ぐべし、是に於て滿山を破裂せしむる亦難きにあらず、吾人は只彼等常識だになき愚なる消防夫の御セッカイを笑殺して已まんのみ、吁。

○ 破羅生

皃玉花外君『社會主義詩集』を著し、不完全なる吾人の社會に於ける不運皃の爲めに歌ふ、不幸官人の忌諱に觸れ、發賣禁止の厄に遭ふ、吾人は官人輩の餘りに神經質なると、權威に賴て人類の社會的大感情を壓し畢るべしと爲せる盲を笑ふを禁ずる能はず、シエレーの詩と覺ゆ『「時」(タイム)のページの尙ほ未だ讀み盡されざる前に、詩人は人類の熱望しつゝあるそが未來の運命を示す』花外君の詩、人類の熱望しつゝあるそが未來の運命を歌ふものにあらずや。ユウゴオ曰く『未來の名は愛也』花外君の歌ふ所、愛の支配すべき社會にあらずや、ボルンスの所謂『世をなべて四海皆兄弟となるの日、遠からず來らんとはすなり』と云へるもの是れ花外君が吾人の爲めに歌ふ所にあらずや、發賣禁止の厄に遭ふて花外君の情更に熱せずや、思ふに是れ天、官人輩の手を假りて更に詩人の胸中に生ける熱火を点せんとするものにあらざるなき乎、花外君更に最近の作十數吟を集め、添ゆるに君が厄に對する世間の同情錄を以てし、紀念集一卷を作らんとすと、乃ち爰に予が胸中一片の同情を撮て寄すること爾。

明治三十六年九月念五日、因伯時報編輯局之樓上にて

西川光二郎

○

花外兄足下

余は社會主義嫌ひの日本政府が、社會主義の演說を妨害し又雜誌『社會主義』に屢々發賣禁止を命ずる丈けにては飽き足らずとなし、足下の如き、やさしき詩人の愛兒にまで其の干涉の手を擴げしとの無謀に驚く。

足下！足下が苦心の作、足下が熱涙熱血の作の、足下の愛する勞働者の手に達せずして、製本中に差押へられ、暗より暗に葬られしとは、獨り足下にとりてのみならず、足下の友人にとりても亦極めて遺憾なるとなり。

然れども飜て之を思ふ、第一に此の干涉は足下に與ふるに風俗事件以外のとにて發賣禁止せられたる詩集の著者たる名譽を以てしたるにあらずや、第二に此の干涉は、日本の詩人と文士――之れまで社會主義に對する政府の迫害を對岸の火災視し居りし――の多くをして、政府の干涉の手の自己の仲間の一人にも及びしとを感せしめ、彼等をして其の態度を一變せしめんとしつゝあるにあらずや、又第三に此の干涉は、足下の胸中に潛める、日本政府に對する憎惡心を大に增さしめたるにあらずや。

果して然からば、足下の『社會主義詩集』の發賣禁止されしとは足下及吾黨にとり寧ろ慶賀すべきとにあらずや。

殊に足下の如き熱血ある詩人の胸中に、日本政府に對する憎惡心の增せしとは、實に千金にも更へ難きとなれば、余は大に彼の干涉を悅こぶ、而して大に日本政府の無智無謀を笑はんと欲す。

足下よ、ものは考へ樣なり、斯く考へて請ふ意を安んじ、決して決心して焦慮するとなかれ。

足下の筆秋毫の虛飾なき足下の筆には確かに生命あり、確かに人を動か

すの力あり而して足下尙春秋に富む、日本幾千万の勞働者の足下に結ぶ所あるや大なり、足下請ふ奮勵し、自重！自重！！益々其の能を大成せられよ、敢て望む、敢て望む。

○

本多雪堂

拜啓貴著社會主義詩集が單に社會主義てふ看板を掲げたるが爲に――小生の愚考する所によれば――發賣禁止の災厄に罹りたるに關し小生よりも一篇の吊詞御請求に預り拜承仕候實は社會問題や社會主義に對しては小生に於ても御同樣常々研究致居り此に十餘年間彼是と讀みもし考へもし多少信ずる所も有之に付貴需に應ドて大に氣焰を吐くは頗る其機を得たるとと心得候得共茲兩三日は執筆の暇を得難く乍遺憾寄稿の義は平に御免被下度願上候愚見によれば近來社會主義を唱道する諸紳士に對する政府の迫害は徹頭徹尾其當を失しつゝあるは勿論の義に候得共社會主義者に於ても亦出來得る丈け其言動を愼み厭味ある言葉やきざの擧動は一切ぬきに致候へば乍此上至極結構のとと愚考致候社會主義者なるが故に故ちに言動の奇矯を衒ふ者之あり候ては決して主義に忠實なる者と謂ふ可からず恰も嘗て基督教徒が其言語擧動の余りにきざに余りに奇矯なりし爲却て社會の迫害を助長したると一般と相存候諺には「坊主憎くけりや袈裟まで憎くい」と申候得共社會の實際に於ては之と反對に「袈裟が憎くけりや坊主が憎くい」と申さねばならぬと多々有之候願くは社會主義者を憎むが爲に社會主義其物を憎むに至らざらんと是れ小生の熱望する所に御坐候多用の際書面にては意を盡さず孰れ拜顏の機を得て緩々得貴意度候早々亂筆(九月廿七日)

○　鳥居素川

拜復未得拜眉候へども時下愈御清祥奉大賀候承者尊著社會主義に關する新體詩發賣禁止の厄を蒙り候由御遺憾千萬相察候古來新主義を唱ふるもの幾多の荊棘に遭遇するは其の例頗る多く、特に細民の苦を訴え其身を殺せしもの亦其の人に乏しからず、近くは我國に於て佐倉宗五郎の如き大盬平八郎の如き其の人なり、併し其の心情は察すべきも徒らに感情に馳せ候ては却て害あり、社會救濟を以て任ずるもの宜しく注意すべき事に候孔子は仁を說き基督は博愛を說き釋迦は慈悲を說き萬世不朽に有之候、吾兄の新體詩亦萬世不朽ならんことを望み、玆に尊著の遭厄を悲み蕪言如此に候頓首。（九月廿五日）

○　徳田秋聲

謹呈御手紙拜見仕候實は過日來旅行中にて其節貴翰を拜見せず昨今漸く歸京致し初めて承知致し候もはや遲れたるとと奉存候が右の始末ゆゑあしからず御了承奉願上候

社會主義詩集の發賣禁止に就いて

尾池狂民

○花外盟兄几下　兄が精苦の餘に就りし社會主義詩集は過般內閣貴族政府の手に押收されたりと聞いては予は決して驚かず。寧ろ『社會主義』の爲めに兄と文淵堂主人との災厄を慶賀するもの也。

○●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●日本政府

が『社會主義』に加ふる迫害は未だ餘りに多からざるを張合なく感ド
て予輩は却つて精の拔ける心地すなり。
○所有迫害は眞理を唱道する神の使に對しては一度は必らず來たるも
のにして。天を恐れざる蠻的屬吏が古來コレを敢行せること兄も先刻史
上に於て御承知ならむ。予は兄の頭上に鐵槌の落下せざりしを幸ひと爲
すものなり。
○兄よ諦めて可なり。諦めは休止に非らず、吾が前途に横はるゝ者に感到
するを申すものにして悟道なり。眞諦の域に入りて人の勇氣は强かりな
む。
○予輩は兄が諦めて眼中無一物の境に入りて而して勇往邁進するの近
きに在るを信ず。
○去り乍ら。予は今の政府に對して容赦ならねことあり卽ち『社會主義
詩集』が兄の舊稿にして種々の雜誌に揭載されたるものなるに。何故に
今日一冊子として發賣することを禁ずるやコレ沒常識の仕打にして人
をバカにするにも程あればなり。予輩は政府がコレ式の事を科むるに至
りては言論の自由の爲め。大に所存あるものたり。
○兄よ。予は兄が立腹の無理ならぬを信ずるが故。兄に多大の同情を有す
ることを申し送ると同時に一番の覺悟ありて可然を所望す。
○予は事に由りては今の政府を敵手といたすに躊躇せざるなり。去れば
迫害の寧ろ一歩を進め來たらむことを希望するものなるが兄も亦同感
ならむ。
○以上の決心あるからには萬論は無駄に歸すてふことに悔悟されて可
なり。予は政府の●●するまでは甚だ多く語らざる可し。
○併し乍ら。詩集發賣禁止の一條はコレを世界に愬へて然る可きものた

ることを同情の一言となし置き申す。

社會主義詩集發賣禁止に就て

小川煙村

兒玉花外雅兄

所謂藝術獨尊論を唱道して。恁麼なる場合にも。恁麼なる事物をも。獨斷的に評論し去る事を好まぬ。且つ貴兄の社會主義詩集を精讀せずして。禁止者と被禁止者の是非を判定し終へる事も喜ばぬ。輕卒なる同情の聲は。或は恐る。阿諛の辭になりはせぬ乎。小生は。唯深き友愃の念を以て。貴兄將來の成就を祈るばかりである。(京都)

○

小栗風葉

拜復只唯相呆れ申候是をしも奇禍と申さずば何をか奇禍と申すべき御意外のほど然こそと御察し申上候世人は能く詩人文學者を指して神經質〳〵と嗤笑候へど當局官吏の神經質なるには却て我等が感心致さずには居られず候今度は一番無政府主義詩集といふやうな題名を用ゐて當局者を揶揄遊ばさるゝも御一興と存上候拜笑

○

繞石迂生

物いへば唇寒し秋の風

とは今を去る二百十年に死沒せし芭蕉の句に候。節は同しく

物いへば唇寒き秋となり

候、感性敏き詩人達はいづれも風邪をひかぬ用心肝要と存ず候。嗚呼。

（九月二十七日）

○

大町桂月

古來藝術家が沒曉漢の俗吏の爲めに凌辱せられしこと、少なからず候ふが、足下の社會主義詩も、その厄を免れ給はず、發賣禁止せられし由、同胞無告の民の爲めに万斛の熱涙を灑いで歌ひ出で給はむとせしに、その口をさへつぐめらる。足下の遺憾さこそと存ぜられ候。小生も、未だ足下の所謂社會主義詩を讀まず候へば、果して禁止せらるべきものなりや否やを知らず候へども、足下が書肆を氣の毒に思ひ更に他の詩を惠與せむとせらるゝは、感歎の外なく候。十月一日まで何か一文をとの御所望に候へども、あまり僅かな日限と云ひ、且つ文債山積して寸暇も無之候間、たゞ手紙さしあげて、一言同情を表し候者也。（九月廿五日）

高著『社會主義詩集』の發賣禁止せられたるを聞きて

奥村梅皐

高著『社會主義詩集』治安に妨害ありと云ふかどを以て發賣を禁止せられたりと聞く、予は未だその著の內容を見ざれば、如何ともこゝに其の理由を發見すること能はざれども、さても恐わい世の中かな、むかしはユーゴー、那翁三世の弊政を諷刺したりとて佛國を追放せられたり、世にそむきて少數の眞理を說くものは、素より將に國家に容れられざるも可なら

ん乎、今社會主義者の一人たる兄が、その胸中の磊磈を吐きつくして『社會主義詩集』なる一書を編成す、社會の多數に喜ばれざると共に、法律はこゝに刊行を禁止したり、兄自ら心に平かならざるものあらんも、これしきの厄災にかゝらんことは、前に心に期するところありたるなるも、唯社會主義を說きて骫骳此に至る、寔に道に聖なる者と云ふべし、予は寧ろ這般の災厄を頌して曰く、是れ兄の眞情の發現也、熱誠此にいたりて、却て兄の眞骨頂をあらはし來るを見ると。

時代の壓迫は個人的不平を產むこと多し、歷史習慣の壓迫は社會的不平を產むこと多し、見よ、個人的不平としてニッチエズムの唱道者あり社會的不平の發聲として社會主義者出づ、彼等が唱道するところのもの、悉く此れを現世に實現することを得るや否やは疑問なれども、唯一意熱中して之れが爲めに死し、之れが爲めに血を流すに至らば、まことに一代の傑

也、釋迦、キリスト、孔子等の如き著るしき功力は無しとするも、社會を感化し、人民を薰陶するの力を推して其の功化の及ぼすところに追數し到らば、吾人は始めて彼等の偉大を發覺することを得べし、且つ吾人は多大の畏敬と、多大の同情とを以て彼等を歡迎せざるを得ざるの理由を解すべし。兄は常に云へり『社會主義は余の信仰也、余の宗敎也』と、兄のこのしはらしき心ばえを愛す、然れども社會主義は極めて少數の宗敎也、弱者の胸にやどれる信仰の熱氣也、加ふるに强者は抑へ富者は壓し、法律は之れを警戒せり、兄が此間に介して二十年三十年を抛ち去るの勇氣あらば、兄以て偉人たるを失はざるべく、這般その詩集の法律の忌憚にふれしが如きは、亦以て少しも其の意に介せざる所なるべし、ハンブデン、ミルトン、民權自由を唱へて其身を全うすること能はず、コムストック、猥褻なる書籍の流行を禁ぜんとして七度人に殺されんとし、文天祥亦楚囚の厄に遭ひ、

憤以て沮洳に投ずたり、古今に其例少なからず、狷介世に落ちて熱度年と共に加はる、叩かれて死するか、獄にぶち込まれて死するか、予は友人の情として、この可憐なる、社會主義者の運命を悲まざるを得ざる也、

花外兄に

醉茗生

眼の爛々に溢れたる
誇り上なき詩人の
自然の聲を汚れたる
掌の上に誰か載せて
たゞ一聯の句なりとも
彼に滅す力あらば
さしひく時を失ひて
潮は天に溢れなむ

汗の清水は野に流れ
勞働の香は土に浸む
ひとり詩人の手帖に
賤か生命は歌はれぬ
有司爾が槍にこそ
邦の平和もくづすなれ

平和の聲をなみするは
夢におびゆる痴愚のみ

かゝる世にしも出ずんば
詩人いづれの世に出でむ
秋は朗らに晴れたるを
はぢらふ節もなかるらむ

○

敬友

兒玉花外君足下

君の詩名は天下の知る所、余は茲に謂はず、先年君が山梨より歸り將に關

片山潜

西に行かれんとするや余等十數人の同主義者は一夜キングスレー館に君が行を壯とし離別の小宴を催したり、余は同夜君に告ぐるに京都奈良及大阪の名勝古跡を探り一大詩聲を振はれんとを期し兼て彼等風光明美の絶勝をして我々信ずる社會主義を謳はしめんとを希望せり、然り余は君に注文するにゲーテが其詩力を以つて往年獨乙民族が那翁の猛軍に其國土を蹂躪され獨軍は敗軍又敗軍を蒙り彼等國民は悲慘の極に苦しめるを慰めたるが如く我壓抑迫害を蒙る勞働者及社會主義者を慰撫せんとを亦渇望せり。

君は爾來我黨の爲めに或は鼓舞作興し或は悲憤慨慨して志士を奮起せしめ或は爲めに慰め、悲しみ又樂しみ實に我等多數の心情意氣を歌ひ又時に資本家富豪の暴横を抗擊し其非を絶叫せり、余は君の社會主義詩集の出づる喜び其社會に供献する所多きを信ずたり、君は之に依つて吾人

社會主義者が演壇に於ても文筆に於ても云ひ能はざる所を自由自在而も遺憾なく面白、悲しく又愉快に論ド來り論ド去り以て社會多衆の云はんと欲する思想を歌へり余は實に君に謝す、社會は之を讀みしならば如何に多く喜びたりしぞ!! 然ども、君悲む勿れ、社會主義詩集の發賣禁止! 吁! 又怒る勿れ壓制の處置を!! 今や君の詩集は全天下の志士と社會主義者の同情の心眼を以て愛讀されつゝあり不幸にして君が詩集は葬埋されたりと雖も慥かに君が籠めたる其聖靈は吾黨の爲めにガーデアンエンジヤルとなれり君乞ふ奮起以て益社會主義の爲めに謳歌せよ!!

(十月三日)

花外に與ふ

幸德秋水

我口たとひ裂かるゝも、
石は代りて物言はむ。
我筆たとひ折るゝとも、
血潮は文字を染成さむ。
骨も碎けよ肉も飛べ、
正義は永く世に活きむ。
同志よ聞かずや、ラサールが、
『我は死すとも文明の、
大運動の死すべきや。

諸君の中の一人だも、
息の根つゞき得ん限り、
我が點したる火焔をば、
燃せよ燃せ、いざゝらば。
斯くと誓はん人々は、
右手を擧げよ』と叫びたる、
ロンスドルフの大會の
最後の一句、今も猶ほ、
我等の耳に響けるを。

陳言一則

（花外兒玉君に寄す）

浩々歌客

花外君足下、僕之を古人の言に見る、心を存して氣を養はざれば則ち麻木の如く、氣を養ひて心を存せざれば則ち病狗の如し、氣は理を載せて行き、理は氣に駕して御す、理氣合一して後に出れば、則ち兼ねて天下を善くすべく、處れば則ち獨りその身を善くすべしと、存心養氣は蓋し易きが如くして頗る其實に處し易からざる所たり、夫れ心苟くも存するを放過せば、則ち躁、心躁なれば熱せずして煩、寒からずして慄、惡む所無くして怒り、悅ぶ所無くして喜び、取る所無くして起つ、若しよく心を存し靜に處する所を得ば、則ち熱と雖も煩されず、寒と雖も慄へず、怒る所無く喜ぶ所無く取る所無し、去就此の如く、死生また此の如くなるべし、古人は之を不動心といへり、眞に浮事に對して妄動せんは、切に當に吾輩の戒むべく愼むべき所たり。

寄語す、花外君足下、君が詩壇に立ちて社會に處するの心、またまさに意を

此に用ひ地を此に存すべきのみ、君が向上の心は、世聞に依りて動くべかちず、君が平昔の事は、人言に依り喜憂すべからず、願はくは平靜なれ、願はくは自然なれ、『芭蕉葉上に愁雨無し、唯だ是時の人聽いて斷腸するのみ』と君夫れ芭蕉の雨聲を聽いて、直に秋を愁ふるの人となること莫れ。

（癸卯十月）

○

來示を忝ふし、多謝々々

只、僕、君と觀るところを異にし、立つところを異にす、僕は社會の進歩を以て無代價に得らるゝものにあらずとし、其の代價としては常に弱者の肉を犧牲に供すべきものなりと信ず、從つて弱者に同情して强者に反抗し、

甲斐一郎

社會全般の平等を計らんとするが如きは、僕の初めより與みするを難んずるところ、

多數の幸福のためには少數の幸福を殺さゞるべからず、罪なく、咎なく、然かも强者の蹂躙するところとなる、情に於ては忍ぶべからずとするも、理に於ては當然の事のみ。僕の此の見を抱しや久矣。敢て君の事あるが故に言ふにあらず、

若し夫れ內務の當局が君の詩集の發賣を禁止したるに至つては、蓋し當今、愚の骨頂なり、僕未だ君の詩集を見ずと雖も、世の批評するところに從つて判斷すれば必らずしも爾かく有害ならざると同時に、又必らずしも爾かく有力ならざるが如し。行はるゝも妨げず、行はれざるも妨げず。僕は內務當局者の此の擧を以て、大ひに臆病に過ぎたりとなす。君は須らく其の勢力——敢て伎倆若しくは眞價と云はず——を買ひかぶられたる点に於

て、內務の當局に感謝すべきなり、又何の怨むる所かあらん。直言多罪、御宥恕を請ふ。

迫害

笠雨生

我黨の詩人兒玉花外の著「社會主義詩集」は國家の安寧秩序を紊亂するの理由の下に、內務大臣兒玉源太郎より、這回突然其發賣頒布を禁止せられたり、何ぞそれ彼等の我黨を恐るゝこと、常に如斯や、而もその理由とする所、何ぞそれ薄弱なるや、その我黨に施す所のもの、何ぞそれ常に卑怯なる、又何ぞそれ男らしからぬや。政府は何が故に、社會主義を恐れ、社會主義者に迫害を加へんとするか、斯は我徒の常に解する能はざる所也、社會主義は果して國家の安寧秩序を紊亂する者なりや、社會主義者の說く所、歌ふ所は果して常に家國の綱紀を誤る者なりや。

『社會主義詩集』一篇、抑も何の恐るゝ所あつて、此の無法なる禁止の命を下したるや、言論の自由を束縛するは、或は彼等の權利なるやは知らず、然れども意志の迫害は、遂にそれ彼等の如何ともする能はざる所とせば、今後幾千の禁止、幾萬の迫害は我徒の毫も恐るゝ所にあらざるなり。

『社會主義詩集』一篇、斯は健氣なる詩人の血也、涙也、其の絕叫や大正義也、大同情也、大慈悲也、大平和也。

社會主義は破壞を叫ぶ者にあらずして、實は建設を敎ゆるもの也、擾亂を起さんとするものにあらずして、却つて大平和を希ふもの也、人類相愛の美を歌ひ、人權平等の大義を傳導するもの也。

誤解せよ、然り飽までも誤解せよ、而して我黨の頭上に向つて汝等は極力暴威を振へ、然り暴威也、我徒は甘んじて汝等の迫害を甘受し、奪鬪し、激戰し、全世界人類の幸福を保全せんがために、絕叫の聲涸れ、血塊喉を溯るも

敢て辭せざるべし。

吾徒は爰に文藝の迫害を說かざるべし詩に對する無法なる迫害を論せざるべし、そは却つて我國の恥辱とする所なれば也、今の內務大臣兒玉源太郎君は「社會主義詩集」を以て、國家の安寧秩序を紊亂するものと認め、これが發賣の禁止を命ずたるは、實に我國の文明史を飾り、我國の文學史に異彩を放つものとせば、源太郎君たる者、又慥に大英傑として吾徒の尊敬せんとする所也。

飜つて我が友花外に寄す、汝の詩集は時の內務大臣兒玉源太郎君のために、其發賣頒布を禁ぜられたるは、寧ろ偉なる名譽とせざるべからず、汝の血、汝の涙の凝る所、如斯大文字として、斯如大雄篇として、堂々たる大日本帝國政府に大恐怖を與へたるものとせば、寧ろ吾徒の光榮とする所にあらずや。

汝の絕叫の聲は空しく葬られたり、否葬られたるにあらずして壓迫せられたる也、汝の大なる聲は今も依然として、社會民人の耳に響きつゝあり、鬱勃たる汝の靈火炎々として燃ゆる時んば、汝の聲は更に大に、更に力を加ふるものとせば、吾徒の前途又賴もしい哉。（南海新報）

兒玉花外兄へ

高尾楓蔭

▲花外兄よ、兄が常に〳〵口にさるゝ塵の都、烟の市、物質的の無趣味極まる大阪へその幽靈の如き骸骨を提げて歸られてから何の恙もなきや、兄が京の烟村君と共に來り和歌浦に月の一夜を明したるは先の先の土曜日なりき、その時和歌浦の美は塵に穢されたる兄が詩腦を些か淸めたりと信ず、兄自らも又しか云ひたる處、而して本月に入りて二回目の兄の來

市は又先の土曜日なりき、弟はしば〳〵兄が當地にきてその烟と塵とに乱され荒らされ穢されたる腦を洗ひ清めらるゝことを私かに喜び居たり、弟が慰の言葉はよし力なきにせよ和歌山の風光は少くとも熱狂せる兄の頭を冷靜にすべくあらんと信ずたりき、

▲あゝ然るに〳〵兄が塵の大阪を逃れてこの和歌山に着かるゝや否や惡むべき電報は兄を追跡し來れり、電報とは何ぞや『シシユ、キンシサレ、ミナ、オサヘラレタ』と兄の新体詩集＝吾等の宗教とする社會主義の讃美歌にして、また黄金阪扈の大魔界に對する進軍歌なる＝それは泥の大阪より蓮花の如く咲き生れんとしたるに、鬼の如き無法なる現政府はまだ世界の一人もその美るはしの花を目にせざる中に無慘にも奪ひ取つて捨てたる也、正に生れて兄弟にも姉妹にもその顔を見せざる中に可愛ゆき天使の首を掻斬つて壓制政府の獄門に上したり、昔鎌倉右府大將が

義經の胤たるの故を以て靜姫の生みたる赤子を襁褓の間に殺さしめたるよりも無法也、慘酷也、非道也、人道を解するもの自由を求めんとする士の如何でか憤慨せざるを得んや、天人共に怒して措かざる處なりとす、

▲花外兄よ、弟は兄の跡を追ひ來りし彼の凶報を兄に示すべく心苦しかりき、彼の詩集は實に兄が血と涙との凝塊兒なり、兄の生命なり、分身なり詩集の禁止は卽ち兄の生命を奪ひたるものなり、兄の分身の子を殺したるなり、今日の世の中に電信てふ文明の利器なかりせば、この凶報を兄の耳に入れしむるを尙遲かりしならんに、一時たりとも兄が心を怒怒せしむるとを後らしめたらんに、弟はツマラなき愚痴をまでこぼし居るよ。

▲あゝ、されど花外兄よ、落膽する勿れ失望する勿れ、社會主義は時代の大思潮なり、如何に人力を以て之を抑制し迫害せんとするも來らんとするものは來らざるを得ず、興らんとするものは興らずして止まんや、思想海

の大激流は之を抵抗し鎭壓すれば益々その勢力を增加し奔騰し荒れ狂ひ遂には一世を席捲せずんば止まざる也、兄の詩集の禁止は革命軍に先つ殉死者なり、阿修羅魔王を亡す天帝軍の先沒者なり、之によつて憤慨の志士は奮ひ起つて革命的大軍の許に集り來るなり、やがては自由、平等、博愛、正義の敵を滅して我等の天下は來る也、理想は達せらるゝ也、其時に至らば兄の詩集は花環を以て飾られ、華盛頓府頭屹然として立つ彼の自由の女神像の如く崇め祭らるゝものなるを思ひて少しく心を安せよかし。あなかしこ。（和歌山實業新聞）

兒玉花外君に與ふる書

高安月郊

秋舊都に入て虫吟方に繁し、烟市また唧々たるものあらん。聞く君世の鰥寡孤獨、泣て勞し勞して泣く者の爲に歌ひ、これを公にせんとして先つ禁止の命を受くと。予は獨り君の爲に悲しむのみならず、かの勞して泣く者の爲に悲しむ、また廣く天下の詩人の爲に悲しむ。蓋し詩人が其著作を公にするや、これに依て千金を得んとするに非ず、萬代の名を得んとするに非ず、況んや一世の平和を害せんとするが如き事をや。若し夫れ一點卑俗の念あらば其詩必ず卑俗、況んや危嶮の意を以てする事あらば其詩必ず詩とならざるべし。予は未だ君の詩集を見ず、されど君が自ら詩集と題してこれを公にする上は、正に一點卑俗の念無く又危嶮の意無く、其歌や虫の吟ずるが如く止むを得ざるに出てゝ彼の勞して泣く者の爲に泣くの外あらざるべきを信ず。しかも先つ禁止の命を受くと、さては君が止むを得ずして歌ふ所のもの圖らずも當世の忌む所に觸れたるか。集題して社會主義といふ。これ何の意ぞ。近世の所謂社會主義は歌ふといふものか、將又君一家の社會主義を歌ふといふものか。社會主義は誠に當世の難問な

り、されどこは詩人が人生觀として十分なる程大なるものか。詩人は聖人と同ドく萬有を包むに足る程の大慈眼あるべし。社會主義はいづくまで大なるか。君が社會主義はいづくまで大なるか。萬有を包むに足る程大ならば寧ろ博愛なり、慈悲なり。君何ぞ標語を大にせざる、君の熱涙は一方にのみ限らざるべし。予は今泣て訴ふる能はざる者が君に依て其苦衷を叙せんとしてまた止められたるを悲しむと共に、更に廣く更に大に悲しむべきの事を悲しまんと欲す。若し夫れ文藝上の苦吟が世間的の法則の爲に制せらるゝに至つては斯道の爲にまた悲しむべし。されどかの字を讀む者眞に詩を讀む者ならんや。市に布く事幾萬卷なるも遂にこれ風前の塵のみ、一世の効果詩人として何かあらん。眞に詩を知るは詩人のみ、彼此相傳ふ印本にのみ依らんや。風もよし月もよし、舊都虫鳴く、君一夜瘢墟に嘯け、烟市棄兒泣くか、我も亦一夕橋畔をめぐらん。

○

高須梅溪

花外詞盟足下

貴著『社會主義詩集』が思はぬ奇禍に罹りて之を破毀に附せられたるは余の怪みに堪へざるところなり從來我詞壇に於てその題材を得來るや概して花鳥風月以外に出でずされど両三年前よりはその範圍稍擴大せられたるが如しと雖も弱者の爲に同情を表し之に希望を與へ之に教訓を寄せたるものに至ては誠に寥々たり我詞壇は先づ何人かに依て此欠陥を滿さゞるべからず此問題の解釋者こそは詩と人生、社會と詩歌の關係をして初めて生きたる意味を有せしむるに至るものなりと信ず。

余は深く足下の人物を知らず、されど詩若し其人格の發展なりとすれば余は深く足下の人格が平民的詩人として詩と社會を近接せしむべき抱

負と熱誠と詩才とを有せらるゝことを信ぜざる能はず。思ふに『社會主義詩集』は足下人格の發展にしてやがて同情と熱血とを弱者に灌ぎたる一大紀念碑たらん乎。

余は政府が何故に如是目的、如是抱負如是熱心を以て公にしたる詩集を破毀したるかを怪む。然れども時代の大潮流は決して劍と威光とを以て壓抑し得べきに非ず必ずや『社會主義詩集』が政府の手より出ざるべからざる趨勢を來さん余は之を豫言して毫も憚らざるなり、足下願くばかくの如き小挫折に屈せず更らに第二の『社會主義詩集』を公にし益々詩と人生を接觸せしむべき任務を完うし合せて弱者の光明となり勞働者の師友たらんことに力められよ。

余は信ず、足下が第二社會主義詩集を公にせらるゝ時之に題するに花鳥風月的の題目を以てせられよ、余は政府が易々として看過するを信ずる也余は足下が正義の爲めに背水の陣を敷かんことを望むものなり、

十月一日早稻田之寓居に於て

○

坪內孤景

愛兄花外君、君が將に世に公にせんとせる新詩卷は、ゆくりなくも公安を害ふものと吏人に認められて發賣を禁められたりといふ、予は未だ其の詩卷を閲するに及ばず、されど君が詩の特質は、從來世に現れたるところに徵して昭々乎として掩ふべからざるものあり、窃に信ずらく、此たびの新詩卷の內容もまた萬々所謂公安を害ふ底のものにあらざりしならんと、あはれ弱き人の子と共に憂患をわかちて灑ぎたる詩人萬斛の熱涙はつれなくも强いて抑止せられたり、恰も是れ赤子の將に井に墜ちんとす

るを見て、疾驅して之れを救はんとする母が、忽焉として背後より立ち現れたる漢子の爲に、その双腕を扼せられて、咄汝の赤子を顧ること勿れと罵られたるが如き觀なからずや、予は之れを花外君の爲に哀むのみならず、また聖代の一恨事として歎かざるを得ざる也。

由來我が吏人が藝術を羈縛する標準は、常識を以てしては往々解しがたきものあり、固よりパルナッサスの高嶺に翔ける詩人の理想と其の麓に匐ひ惑へる蠢々たる俗衆の好尚とが、常に相乖離することあるは必ずしも異むに足らず、故に藝術鑑賞上の標準と行政取締上の標準とが全然合致せざることを、事新しく我が吏人の徒に對つてかこつものにあらず、唯常識を以てすれば風俗を亂す虞なきのみならず却つて風俗を益すべしと思はるゝ藝術をも、吏人は間々之れを認めて強ちに風俗を亂すと做し、或は常識を以てすれば、公安を害はざるのみならず却つて公安を利すべ

しと思はるゝ藝術をも、また吏人は往々之れを認めて必ず公安を害ふと做すに至つては、所謂行政取締上の標準なるものゝ運用は、全く當を失せりと言はざるを得ず、蓋しその運用は常識を逸れたる甚だ卑しき趣味甚だ低き見識に基づいて措置せられたるものなればなり、之れが爲に我が清新なる繪畫も嘗て迫害を蒙りぬ、我が優美なる演劇も嘗て迫害を蒙りぬ。我が超邁なる文學も嘗て迫害を蒙りぬ、我が卓拔にして當代の福音とも言はるべかりし新思想も嘗て迫害を蒙りぬ、花外君の新詩卷の如きも、また恐らくは這般失當なる吏人の措置に誤まられて遂に坑儒焚書にひとしき禍を買へるものか非か、思ふてこゝに至る、予は藝術の運命の數奇を今更に浩歎し、且つ差當つては、『社會主義詩集』の發賣を禁められたるは、社會の公安の爲に却つて不幸なる出來事なりしことを痛恨せざるを得ず。

昔はヲルヅオルス記して曰はく、偉大にして且つ創新なる凡ての作家は、世人の舊來の趣味に容れられず、故に作家は獨力以て一代の新趣味を開拓し、而して後自己の作を世に行はれしむることを力めざるべからず、蓋し此の法則は古往今來渝ることなし、是れ我が一友人の予に對つて語れる言なるが信に然りと、詩人は實に種々の意味に於て一代の豫言者たり救世主たるべき天職を有す、古來殆ど生れながらにして當代の寵兒となり、風雲に乘ずて名を肆にしたる詩人なきにあらず、されど新思想を宣傳せんとしたる詩人にして、其の新思想の眞價は當世に認められずして却つて王者の爲に忌まれ吏人の爲に苦しめられ社會全般の民衆の爲にすら嘲られ、其の新思想の眞價が認められざる自然の結果として、米鹽も給せず知友も背き去り、獨り涕を掩ひて人生の多難を哀み、世人の並び擧つて其の言を聽かざるを歎きて生を終へたるものは、僂指に遑あらざるなり、薄倖の詩人が悉く一代の豫言者たり救世主たらざるは言ふまでもなし、されど一代の豫言者たり救世主たる天職を盡くさんとせる詩人のうちに特に薄倖の詩人多きことは誣ふべからず、古今幾多の詩人の傳紀を讀んで此の如き節に至る毎に、其の詩人の志の壯烈なるに感激して而も其の迹の悲慘なるに袖を濡らすもの、蓋し予一人のみならざるべし。

凡そ詩人の天職は二面にわたれり、一は理想界に於ける天職にして、他は現實界に於ける天職なり、一は美の神に專ら奉待するものにして、他は人類に專ら身を獻ぐるものなり、一は超世間的にして他は世間的なり、詩人の志す所は果していづれを重しとしいづれを輕しとすべきか、究竟するところは、一指は卽ち天上に向かひ、一指は卽ち地面に向かふ、是れ理想界に於ける天職と現實界に於ける天職とを具足したる圓滿なる詩人ならん、然れども是れは千百載にして纔に一人すらあることもなき詩人の大

聖なるものなり、凡才自知の明なくしてなまゝいに之れをまねぶときは、却つて凡愈々凡となり、美の神にも寸毫の功を致すなく、人類の爲にも何等の益なきものとなること大抵皆然り、而して天の詩人を生ずるや、實際かゝる似て非なる圓滿詩人を生ずることは尠うして、或は超世間的天職を主として負はしめたる詩人を生ゞ或は世間的天職を主として負はしめる詩人を生ゞ、各々其の特得の天職を盡くさしめんとする趣あることまた至妙なるかな、例證を遠きに求むるを要せず、花外君の如きは、卽ち實に主として人類の爲に身を獻ぐべき天職を負うて生れたる當代その數多からぬ詩人中の一人といふべし。

古來薄倖なる詩人は專ら超世間的方面に住して、美をほしいまゝに味はんとせるが爲に、却つて世に容れられざりし者も多し、予は此の如き詩人に對しても其の志を嘉して其の迹を哀しまざるにあらず、されど要する

に彼等は人生と相涉ること稍々間接的なり、近き例を取つていへば、裸躰畫が展覽會に陳列せらるゝことを禁められたると否と若しくはヂューマの『椿姫』が世人に繙讀せらるゝことを拒まれたると否とは人生の問題と相涉ること稍々間接的なり、若夫れ專ら世間的方面に着眼して、人類を慰籍せんとせる詩人は、人生と相涉ること特に直接的なるが故に、社會を感化することも更に大にして、また社會と杆格することも更に多し、近くはスタエル夫人やユーゴーやトルストイやカーライルや此の如き詩人の世間の爲に力を盡くさんとして、世間と健鬪したる迹は殊更予を感激して措かざらしむ、『社會主義詩集』の著者花外君、希くは記憶せよ、人類の爲に盡くさんとする詩人は、世間と衝突すること特に多かるべく、而して君が思想のやがて凱歌を奏せんときまで、君は世間と健鬪せざるを得ざるべく、君の詩が吏人の徒にも喜んで讀まるゝ程に一代の思

想を開拓するの天職は、殆ど悉く係つて君自身の雙肩にあることを。

按ふに當今の社會は思想空虛の時代なり、宗教界に見よ、教育界に見よ、藝術界に見よ、予は嘗て迷悟の境に彷徨し、一道の光明をたづねて我が精神の安慰を得んと欲し、佛耶の高僧先覺に就いて精神上の指導を仰がんとせり、然るに當今の宗教家が精神上の指導者としては意外に思想淺薄にして熱情缺如せるを見たり、又予は嘗て教育家の末班に列なりて國民の理想をはぐむべき教育家の思想が意外に固陋醜汚なるを見たり、藝術界は如何の狀ぞ、紛々たる寫實小說何ぞ其の思想の淺薄なる、滔々たる抒情詩何ぞ其の感情の浮泛なる、言を切にしていへば、當今發賣を禁止せられざる程の凡ての文學は、害もなければ利もなく藥にもならねば毒にもならぬものゝみ行はる、是れ實に職として當代の社會に思想缺如せるが爲ともいふべし、予の觀察は狹隘にして必ずしも當らざるものあるべしと雖もまた決して遠からざるものなるを信ず、花外君の新詩卷の如きは、此の思想空虛の時代に於て、偶々思想の聊か充實せる詩が現れたるが爲に時代の忌むところとなりて其の發賣をも禁めらるゝに至りしものと觀ずれば、また何の異むことかあらん、唯此の如き時代に於て、思想の聊か充實せる詩が忽ち暗處に葬られて、之れが爲に社會はます〳〵平凡、淺薄、浮泛なる思想に甘んぜざるべからざるの一事は、豈社會の公安の爲に不幸なる出來事といはざるべけんや、予は寧ろ當今の如き時代に於ては、藥にもあれ少々毒にもあれ社會の思想を振盪し亢進せしむべき救治劑として新思想を歌へる文學の世に現れんことを望む、況んや花外君の詩卷の如き純乎たる藥ともいふべきものなるに於てをや。」

予は花外君の新詩卷が發賣を禁められたることを新聞紙上に觀て、忽ち詩歌の運命と詩人の天職に關する感慨限りなく我が心頭に湧き來たれ

り、すなはち其の一端を記して君に寄することゝしつ、飜つて思へば、當今思想空虛の時代なりと雖も、花外君の詩に現れたる思想は、未だ社會の全般に容れられざるが爲に、吏人の徒の忌む所となりたれど、社會の一部にはまでゝろより君の思想に同情を寄するもの啻に一二人のみならず、花外君の如きは煢獨全く後援なきこと彼の古來の不遇なる詩人に比すれば、甚だ自ら慰むべきものあり、予は我が親愛なる友が今や決して逆境に立てる薄倖なる詩人にあらずして、寧ろ將に順風に白帆を張りて萬里の波濤に乘り出でんとする幸福なる詩人なることを深く悅ぶものなり。

○

梁川生

此度の奇禍は誠に心外千萬の沙汰と存候。

詩人の溫情の翼は、よく石をはぐゝみて鳩となすべく、詩人の批判の劍は、よく人を斬つて馬に班せしむべし。愛と義と、慈と嚴と、この両刃(たゞは)の言葉を直ちに神に受けて下土に宣する詩人の天職をば、何物も、何人も、冒すべき權利はあらず。されば こゝに、俗世に對する噴薄の不平塊を、僅かに風月の薄き衣につゝみて、暗に一代の人心に訴へむとする一種有主張の詩ありとせむも、俗世の王權は、尙ほ心してその裳裾をだに瀆さゞるべき也。まして是れは、世途の役々に聆憶れ心倦んドたる憫れむべき人の子の爲め、一掬同情の涙を灑がむほか、何等他意なき醇乎たる心の聲なるを、何物の暴威か、來たつて其の口を箝し、其の筆を縛らむとはする。

嗚呼、彼等世權を執れる徒(こゝもがら)に、果たして詩を批判する權利ありや、否らず、詩はむしろ飜つて彼等が批判也。見よ、詩神が批判のしげき劍影は、聲無うして森然、既に業に彼等が頭上に雨下電下しつゝあるにあらずやかくして

恢々遺算なき神の公道（ヂヤスティス）は讃むべき哉。
わが勇敢なる少壯詩人よ、奮起、倍々その正義の劔に仗つて、その温情の聲を宣べよ。勝利はすでに君の有に候はずや。

泣て我花外に誥ぐ

中村諦梁

花外詞兄

曩に兄が著「社會主義詩集」の發賣禁止せらるゝと聞くや、予は實に痛恨骨に徹し怨皇一文を草して、是を予の新聞に掲げたり、惟ふに兄既に一讀せられしならん、頃日兄が再び筆を執て其雄渾と高遠なる詩を世に公にせられんとするの報に接し、予は予が兄に望む所のもの果して空しからざるを知り、痛快の情に堪へず、茲に不文を顧みず再び筆を倩ふて遙に兄に

誥げんとす。

玲瓏玉の如き天性と、豐富海の如き學殖と、温かき情と、熱き涙と、皆兄が天然の純性にして、眞理より云へば兄ほど平安に居るべき條件に富みたる人はなからん、しかも又此等の性、一々、詐欺、譎狡、陰險、凶暴、我慾、無情、利己、佞猛、あらゆる惡德文字を並べて猶其一端をも形容し得ざる今の社會と一も相容るゝこと能はず、是に於て乎此世に於ける薄倖者、兄の如きもの復他に一人もあらざるべし、然り、一人もあらざるべし。詩思に乏しき予は新体詩を知らず、予が日夕好んで讀む新体詩は天下唯々兄の詩のみ、惟ふに頑固予の如き新体詩の讀者は復他にあらざるべし、故に予は兄の詩が他の多くの新体詩人と甲乙あるや否やを知らず、かく云へばとて予は今の新体詩人の詩を一句も讀まずといふと誤了する勿れ、予は皆讀みたるなり、然れども予が好んで日夕讀む所のものは天下唯兄の詩のみ、惟ふに兄

も亦之を知らん。

是の如き思想の予が今兄の詩を謳歌し歎稱するは、社會に對して甚だ偏頗に失するを知る、兄の詩に對して賛評するは、蓋し世其人あらん、故に予は今是處に於て兄の詩に就て云々せざるべし、予は兄が再び其金玉の詩を世に問はんとする志に付て、聊か誥ぐる所あらんとす。

迫害を蒙りしものにあらずんば迫害を蒙りし人の心を知ること能はず、予は自ら信ず、兄の多くの友人中、予は最もよく兄の心事を知るものゝ一人なるを、しかも亦予は、予の如きもの兄が今回の大厄の十が一にも値せざるを知る、何となれば予は予の信仰を迫害せられたるも、予の著法義惑亂論は何の迫害をも受けずして出版することを得たればなり。

唯予の先輩は今より百年前に於て其信仰を迫害せられ、其身は殺され、其著は原稿の儘燒き棄てらる、予等遺孽今猶志を仝ふして苦節を守るもの、

蓋し是が爲なり。

而して兄や予の未だ嘗めざる苦を嘗め、其性命に等しき著書を絶版さる、先輩が此苦き經驗を有せしを見る予が、兄の苦き經驗を見る、豈一種の感なからんや、水は流下するものなり、而して之を激すれば奔騰す、人はものなり、而して之を苦しむれば却て強し。

秦皇儒を坑にし書を焚きて孔門仁義の敎竟に世に洽し、ニロ大帝基督敎を迫害して同敎今や世界に汎布す、天の大任を人に下さんとするや先づ試むるに艱難を以てするは孟子已に千年以前之を唱道したり、古より大作は大厄の後に於て出づるものなることは、豈蠶室の司馬遷自ら史記を作りしのみを待て後に知らんや。

予は信ず、兄が今日の勇氣は、其昔日に幾十倍しつゝあるを、これ予が嘗て聊か自ら經驗せし歷史にして、兄は更に現實に於て大なる經驗を嘗めつ

ゝあればなり。

花外兄よ、願くば今日の志を以て終生の志とせよ今日の心を以て終生の心とせよ、上來蕪言幾百、兄に誥ぐる所要するに是に過ぎず、山河相隔りて道途遼遠、明月の下、秋露の上、相抱いて號泣する能はざるを恨む、兄夫れ加餐せよ、予も自重せん、頓首々々再拜。

○

謹啓

貴著「社會主義詩集」の内容は素より小生の知らざる處に候へ共嘗て「獨立雜誌」時代より貴兄の詩を讀みて其弱き者の爲めに叫ばるゝ血の聲、虐げらるゝ者の爲に迸る焰の響、正に人の肺腑に徹し直に心宮の奥裏を熾かんとするが如き一種當るべからざる奔放熱烈の調あるを喜び居候一人に有之、右の詩集も定めて貴兄の特色を發揮し啻に新詩壇の水平線上突如として一活火山の噴出せるを認め得るが如き壯大の觀をなすのみならず、彼の弱き者、虐げらるゝ者のために人道の炬火を擧げて其暗黑なる前途を照破するの一大光明となるべかりしならんを、例の薫蕕を辨せざる筆法一抹の下に此度の御災厄誠に惜むべき限りと存候、一桶の水はよく爐火を消すべし、されど千桶の水も火山を消し得べからず。貴兄冀くは愈々努力して自ら信ずる處を發揮し遂に他をして信せざるの止むを得ざるを悟らしめ玉へ、取あえず御慰問迄敬具

中村春雨

○

中島孤島

花外兄足下

思ひしげき頃に候、淋しとや、淋しきは君のみならんや、軒を傳ふ玉滴の音にも、萩の下枝に細り行く蟲の聲にも、芭蕉葉の破れにも、柿の實の赤きにも、秋は今宇宙に充ちて、千里を照らす名月の下、澄み渡る心の波に、宿るは同ド一つの影にや候べき。

今宵は亡き弟の日に候、月に會する者三人、幼き姿を思ひ、坐に君なきを思うて、三つの心同ドく震ふ、相見て一語なし、風梢を拂うて颯々として南に過る、あゝ風よ、何すれぞ此の思ひを載せて我が淋しき友に送らざる、仰げば星は疎らに、飄々として雲月前に舞ふ、あゝ彼れ來る、あゝ君來る、此の胸の轟き、いかでか我れを欺かん、あゝ今宵此の月に對して君が心の調べ、嘈々として遙かに三つの胸に通ふを知り給はずや。

あゝされど君よ、今は徒らに泣くべき時にあらず、我等は戰場に立てり、戰は我等の生命なり、何ぞ豫め勝敗の數をいはん、曾て胸を拍つて君と共に人生の意氣を語る、願くば共に〳〵進んで夫の荊棘を刈らんと。爾來數年、身は碌々として尚ほ槽櫪の間にあり、時に君を思うて、夢魂西に趨すること幾度ぞや。幸にして當年の意氣尚ほ全く銷せず、燦たる夫の星光を仰いで、獨り自ら慰む。あゝ君悲むを己めよ、人生一片の意氣あらば、十歩にして斃るも、何ぞ必しも憂ふるに足らん、幸に自重せよ。（十月五日）

○

和軒居士

花外君足下、足下の近業『社會主義新幹詩集』は、治安を害するの故を以て、

不幸にして、發賣禁止の嚴命に接したりとか。足下が多恨の詩腸は、定めし桃李方に開かんずる時、嫉風妬雨に會ひたる心地して、其の運命の數奇に泣きたるならんか。されど天下の難事は、必ず易に作り、天下の大事は、必ず細に作る。是を以て、物を制せんとするの士は、先づ其の細易に於いてすと云へり。彼の當路の士や、小膽豆の如く、足下が呼號の大なるに驚き、倉皇命を下して、詩集の首足を斷ちたりと雖も、而も當局としては、適切なる處置と云はざるを得ず。其の細易に於いて、此れを抑制したれば也。

されど當路の藝術眼を缺くや久し而して其の政策の拙劣なる、轉た嘲笑に耐へざる者あり、當路は嘗て戀愛文學の發賣を禁止したりき、而も其の一千部を沒收して、之れを一刀兩斷するや、卽ち此れを屑屋に拂下げたりき、屑屋元此れ射利の徒なり。卽ち其の一千部を整頓して、四十部を得、之れを美裝して高價に鬻き、貸本屋をして讀者に貸さしむ、讀者好奇、手より手に渡り、目より目に映ずぬ。先きの嚴命は雷霆の如くなりしも、其の風敎に於いて果して幾何の効果ありしぞ。物に表裏あり、事に內外あり、思はざるべからず。

僕又頃日白馬會に臨みて、所謂特別室と云ふ者を瞥見せり。室や幔幕を張りて、俗人の入るを許さず、二三子椅に倚り、卓を圍んで筆紙を備へ、一々誰可して然る後に裸美人を拜觀せしむ。事風敎に効あるが如きも、而も此れ只だ形式に過ぎざるなり。人は幔幕の裏に衆妙を見んとす、幕の有無は畢竟何等の効果をも爲さゞるなり。されど法は形式を尙ぶ、彼のかう〳〵しき幔幕は、以て當路の凡眼を眩惑するに足れり。花外君足下、志士處世の法亦實に此處に存せざるか。それ大聲は俚耳に入らず、士のよく志を當世に行はんとする者は、先づ其の虛名を捨てゝ實質を取る。足下が呼號余りに大なりしが爲めに、遂に當路をして、風聲鶴唳に驚かしめたり。花外君足下

足下若し濟世の大志を就さむとせば、必ずしも社會主義を呼號するを要せざるなり。乞ふ低唱して貧者弱者の肺腑を動かすを務めよ。

惟ふに社會主義てふ名稱は、ロバート、オーヴエンに始り、レーボー之れを大陸に傳播せりと雖も、經濟問題としての社會主義、政治問題としての社會主義は、洋の東西、時の古今を問はず、代として有らざるなく、國として存せざる所なかりし也。試みに活眼を開いて活史を讀め、何故に井田の法は行はれしぞ、何故に政權は武門に歸せしぞ、何故に佐倉の宗五郎は、一村鎭護の神靈と爲りしぞ、何故に六方組は跋扈せしぞ、何故に利末記は、奴隸の制度に反對せしぞ、何故に箴言は富者の貪婪を戒めしぞ、何故に富者の天國に入るは、駱駝の針の孔を穿るよりも難きぞ。史を繙いて社會の變遷を讀み、志氣の消長に留意すれば、一代の志士城狐社鼠の術中に陷り、或は鐵窓に呻吟し、或は斬頭場裏の露と消えたるもの頗多し。花外君足下、足下果

して社會主義の詩人たらんとせば、眞個に一大決心を要す。今の新聲詩人は、風露に吟咏する小才子のみ、其の一代の思潮とは何等の關係もあるなし。聞らくラッサルの長逝するや、講師ベークは、其の石碑に銘して「思想家にして戰士たる、フエルヂナンド、ラッサル」と云へりと。げにや彼れは曠世の大戰士なりき、それ上に不明の俗吏ありて、下に暗潮の急なる昭代に生れて、社會主義の詩人たらんとせば、彼のラッサルの如く、大膽勇敢ならざるべからず、謂ふ所のセンチメンタリズムに溺るゝ如きは大に不可なり。花外君足下、足下既に標榜して社會主義の詩人と云ふ、吾人は足下が藤村晩翠以外、天來泣菫以外、別天地を開拓せるを悅ぶ。されど足下にして、秋霜義烈の氣慨に乏しく、彼の口舌の徒と爲り、紙上の主義者と爲り、禁止の嚴命に接して、潛然菫の詩人と爲り、明星の詩人と化し、臙脂の詩人と豹變せんか、吾人は恐る、世人の其の無氣力、無節操、無定見、無主義を痛罵せんこと

を。今や政黨腐敗して、闘國生氣なし、此の秋に際して、人道の陳吳たらんとするもの、此の主義にあらずして何ぞや。足下既に人道の戰士たらんとす、足下にラッサルの義氣ありや、男子世に立つ醉生夢死の徒たるを耻づ、足下は果して主義の人なりや、はた豹變の詩人なりや。時よく眞相を語るならむ。今只だ足下が思西氏を思ふの友情に感ずて、少しく微衷を吐露せるのみ、婆心よく君の一顧に價せば幸甚幸甚。（明治三十六年九月三十日）

壓迫來

黑田湖山

『社會主義詩集』發賣禁止の令を受く。

何が故を以つて然る乎。

法律に觸れたるが故也。

× × × × × ×

善なるものは法律に依つて守らる。

法律は善の味方也。

法律に觸れたるものは、是れ卽ち善ならざりしが爲めならずんば非ず。

× × × × × ×

著者の曰く『社會主義詩集』の言へる處は總て善也と。

而して、彼れは改めて法律命令執行者に問うて曰く、『社會主義詩集』は何の故を以つて法律に觸れたる乎と。

是れ正に然るべき至當の質問也。

× × × × × ×

而も、法律命令執行者は、默として、是に對する一片の答辭だに示さゞる也。

善は同時に公明ならざる可からず。

何の故に彼は答へざる乎。

答へ能はざるが故也。

何の故に彼は答へ能はざる乎、

公明ならざるが故也。

何の故に公明なる能はざる乎。

善ならざるが故也。

余は茲に至つて、滿腔の誠意を傾けて、以つて著者の憤懣に和せざる能はざるを見る。

× × × × × ×

法律に觸れたりと言ふ乎。

永久に亘る法律は、斯くの如き曖昧を容さず。

唯だ此の詩集の觸れたる處は、暴力の綱に觸れたるのみ。而して暴力は來れり。

是れ壓迫也。

弱者をしひたぐる强者の壓迫也。

而も善は聖なる力なりき。

善なるもの終に勝つ可し。

泉を蓋うて、水の出でざることを信ずるものは痴也。

× × × × × ×

晩風既に峯端に及びて、日漸く暮れんとするものあり、吾等は待つべき乎。

智なるもは言へり、空しく手を勞することなかれと。

賢なるものは言へり、徒に汝の胸を焦がすことなかれと。

明日は花開かむ。明日花開くべき故を以つて、今日の暗雲に甘んずる能はざるものは夫れ愚者乎。友よ、然らば、共に吾等は愚者なるべし。

× × × × × ×

善に中心を保たざる壓迫何の恐るゝ處ぞ。

待つこと能はざる吾等の性格は、是れ決して自ら造れるものに非ざる也。

進め、不斷に進め、進まば終に貫かれむ、大なる力を以つて、斯く吾等の頭腦と四肢に迫れるものなり。

迫れるものは何乎。

法律よりも、法律命令執行者よりも、嗚呼人よりも、人の集りよりも、更に甚だ強きもの也。

友よ、悲む勿れ、此の勢に導かれて、力の力に双向ふ敵に當る、憶れて仆るも寧ろ人の幸ならずや。

○

草村北星

御高著『社會主義詩集』發賣禁止の厄難にかゝり給ひしとのを只今旬餘の病床より出でゝ初めて御手管に接し驚入り申候斯る有司の世にあるは誠に痛嘆すべき所に御座候直接に其迫害に接し給へる貴下及び金尾君のみにあらず天下文壇の士はひとしくこれを聞いて呆然とし思うて痛憤したる事と奉察上候小生如きにも多少の意見なきにあらざるも既に明星誌上には畏友春潮氏の論文も出でをる今日のをなれば殊更贅を省き申候小生本月末か來月上旬あたり下阪の用向有之候へば何れ御引見の榮を給はり度高机にこそ卑見をも可申述候金尾君へは小生一度

拜眉を得たるとあり氏が利害を眼中に置かずして文壇の爲めに盡し給へるとは友人等よりも承りをり此度の如きを承り候ても不少御氣の毒の念致しをることに候願はくば此後ともかゝる俗吏の打擊に意を碎き給ふとなく奮て當初の御志を伸べ給はんと蔭ながら切望此事に御座候長々と御返事も不申上失禮の段々は只今迄御手紙頂戴しつゝも拜見致さゞりしためにに候へば此儀は幾重にもおゆるし下され度候右要用のみ乱筆御容赦下され度候頓首（一月六日）

○

謹啓

貴著『社會主義詩集』が其筋の忌偉に觸れ發賣禁止の災厄を蒙むりしは余の讀詩社會の爲め遺憾とし且つ其著者たる足下に對し深く同情を寄せざるを得ざる所なり

昔時は獨國宰相「ビスマーク」社會主義を鎭壓撲滅せんとして鎭壓法を設け社會主義者の集會言論文章を抑止したるも遂に何等の効なくして徒らに社會主義の勢力を增すに終りしに非ずや

夫れ「ビスマーク」の大才偉器を以てすら法律の力に依り社會主義を如何ともすべからざる此の如し況んや「ビスマーク」の大才偉器に非ざるもの漫に官權を弄して社會主義の鎭壓撲滅を試みんとするに於てをや

弄權禁著籌何拙
俗吏由來不解治
慷慨知君無訴處
又呵健筆卿新詩

柳内蝦洲

俗吏時務を解せず如何に社會主義の著を禁ずるも豈に能く社會主義の發達を防くを得んや無効のみ徒勞のみ

想ふに足下の筆足下の詩此災厄に遇ふて世間貧者弱者の爲め更に萬丈の氣焰を吐くものあらん歟、拜復（十月一日）

鐘に寄す

山本露葉

生と光のゆり床に
起てよと聲を勵まして
旦の母をよび來る
鐘よ、響の王たらば
空をどよもす雷音に
眠る自由を喚び醒せ
自由の天に湧きかへる
潮を海にみちびきて
古き世紀を覆へし
新しき世を招ドたれ
巨人の如き掌に
詩の獨立を誘はずや
曾て羅馬に鳴りし時
若きダンテは目ざめたり
曾て希臘に鳴りし時

サッフォの詩は粲きぬ
今此の國を震はして
偉なる力をこゝろみよ

森の神秘をゆるがして
精舍に靈をよぶ如く
害はれたる詩の爲に
自由の精を誘ひて
讃美の鳩を踊らしめ
藝術の國を守らせよ

嗚呼、獨立と自由とは

翅もあげず身ドろがず
詩歌の園に眠りたり
天の大海かたむけて
生命の水をそゝぎたる
鐘よ、雲まで鳴りわたれ

兒玉花外君に寄す

前田林外

梵網經か戒經かに、慥に左の如き聖句ありしと記憶す。曰く。『戒は大明燈の如し。能く長夜の暗を消す。戒は眞寶鏡の如し、法を照して盡く遺すこと無し。戒は摩尼珠の如し、物を雨らして貧窮を濟ふ。世を離れて速かに成佛することは、唯此の法を最なりとす』と。

我等想ふに、兄が社會主義詩集は大概は大明燈的詩篇、眞寶鏡的詩篇、摩尼珠的詩篇より成立せしものならん。何となれば、何、妙に社會の暗黑を照らし、節、痛く世態の慘憺を嘆き、篇、好く窮民の憂愁を慰籍し、所謂衆生濟度の一大目的を達せんは、蓋し兄が作詩の理想にして、兄は常に彼の戀愛を下劣に歌ふ獸的詩人や、彼の自然を隱逸に咏ず、一生を獨り樂む底の詩人と肩を比ぶるを欲せざればなり。

さあれ、兄が折角世に顯示せる、大明燈は遽に消されたり、眞寶鏡は直に破られたり、摩尼珠は忽ち碎かれたり。こは獨り著者たる兄のみの災厄と云ふべきか、そも又窮民の不幸と云ふべきか、我等も亦うたゝ痛憤に堪へず。

（九月三十日蓐中認む）

○

松崎天民

花外君机下、月明に乘ずて、詩歌行吟せし一夜の興趣、今尙ほ忘れ難く候。貴著『社會主義詩集』は、文淵堂にて校正刷を一讀致せしのみ、未だ是非の妄評を申上るの機會無き內、突然發賣禁止の命に接せられ、御失望さこそと、千萬推察致し居候。然れども之れ法の命ずる處にして、吾等は彼是と抗議を挿む可き、權利無き由なれば、餘り御憤慨なされぬ方、男らしきかと存居申候。

小生は『社會主義』に就いて、多くは知る者に非ず。然れば貴兄の『社會主義』が、果して『詩』としての價値幾程なるや、又貴兄の宗敎として、健全なるものなるや、否やを知り不申候得共、要するに貴兄の主義とせらるゝ處は、其の詩の生命とも申すべき『同情』に他ならずと存居候。『同情主義』と

謂得べくんば)これ小生が懷抱せる一箇の信仰に候。社會主義と謂んには、餘りに大袈裟也、小生は貴兄の主義と、小生の主義とが、『社會』の二字を冠するとの相違こそあれ、其の内容に至つては、『同情主義』に他ならざる事を、貴兄の詩に依りて發見致し候。

基督敎を汚せし者は、半熟の傳道師也、佛敎を衰亡せしめたる者は、破戒の僧徒也。政治界も、敎育界も、文藝界も其の人に依りて、犯し汚されつゝある現代に於て、漸く多きを增せる社會主義の標榜者にも、亦此輩なしといふべからず候、貴兄此間に處し、最も自重せられんことを祈り候。草々敬具(三十六年十月三日夕大阪朝日新聞編輯課にて)

○

正岡藝陽

謹啓

先日貴書を頂す、筆硯愈御勇健之趣奉大賀候

先般筆禍を買はれ候由滿腹の同情を表し申候小生に一文を囑せられ候て身に餘る光榮に候へども先日新聲社引受殆ど忙殺せられんばかりに有之候故此儀ばかりは御免し被下度候尙小生は諸方より惡口ばかり云はれ、甚しきは私行の摘發迄やられ、之れも惡口を云ひたる報には候得ども兎に角文壇にては豫戒令執行者と相成り居る次第、此やうなものが貴著の一部を瀆す事空恐しき譯に候

元來が世と相容れぬ小生、況んや尻の穴の小なる丈けエラキ人たる文壇には聊かも望無之候大きな聲を出しても叱からるゝ文壇では小生の如

き野生兒はトント絶望の外無之候
追々には賣文商より轉業せんかとも存ド居り候、出來る丈早く泥足を洗ひたき考へに候得ば筆執れとの御指令丈は承知致兼候されど私人として老兄には心より同情を持ち候唯其信ずる所に勇なるものあらば小生の師に有之候先は御返事而已頓首（九月廿八日）

文壇の提醒

劍南道士

○劇界の天才團洲の訃音が傳へられたるの日、吾人は同ド新聞紙上に於て、內務大臣兒玉が、新体詩家兒玉花外の詩集『社會主義詩集』（大阪文淵堂刊）の發賣を禁止したりとの報を見たり、吾人は以爲らく。是近時文藝上に於ける二個の提醒的事象なり。新舊演劇の大時機を劃するに於て、斯道の北辰を失ひたる影響に於て、衆目を此に集注せしめたる團洲の死は、藝術界に提醒を與へたる事象としていふまでも無く重大なり、加之尙ほ文藝界にすら重視せられざる新体詩集の發賣禁止は、また決して輕視さるべからざる事象なりと。

○從來風俗壞亂といふが如き主旨にて發賣、禁止の厄を蒙りたるもの、小說に於ける魯庵子の『破垣』隨筆に於ける有美子の『戀愛文學』の如き文藝上述作に其例少からず、されど治安妨害といふが如き名を以て同じ災厄を新体詩集に加へたるものは、蓋し此次を嚆矢となす、而して前者は卽ち風俗に關するのみなれども、後者に至りては、其義實に思想上の事に關するものとせば、等しく文藝上のことながら、前者の影響に比して後者は頗る重く深しと言はざるべからず、吾人は今更に文藝の道には殆ど何事にも分曉ありと認め難き當局官人が、何故に『社會主義詩集』の發賣を禁

止せるかを問はざるべし、吾人の言はんと欲する所は、曾ては文藝界にすらなほ未だ重視されざりし新体詩歌が、今や思想的産物なり社會の勢力なりとして、爲政者に認めらるゝに至りたる事實是なり、既に軍歌となり、既に教育歌となり、既に市歌となり、既に琴歌となりて兒女の家庭に入り、漸く社會と緊切なる交渉を事實に表現し來れる新体詩が、今はた政治上社會上一個の思想勢力として迎へらるべき端緒を開きたるは、一個文藝上に特記すべき提醒的事象ならずや。

○寄語す文藝の士、新体詩が單に花鳥風月戀愛の詠嘆情味に資する兒女的文字たるのみに非ずして、人道を提醒し、感化救濟活動發奮等の精神を皷舞激勵すべき思想の生命を給する風雲的文字たることを證すべき時は來れり、之を求めて未だ得ざるの士、公等が新体詩に時と人とに切なる詠懷を世に表することを得るの機會は來れり、顧みれば時勢は政府をして文學に提醒を加へしめたるなり、若し夫れ花外子の詩や、未だ琢磨を究めざる玉の如し、之を機として宜しく大に奮ふべく抑もその詩が文學を提醒するの動機たりしを思はゞまた以て大に慰むべきのみ。（讀賣新聞打月棒）

○

後藤宙外

拜啓

貴著社會主義詩集發賣禁止の厄に罹かられ候由何とも申しやうなき遺憾の儀に御座候されど一方より云へば從來の如く文藝の事は善惡とも に社會とは無關係のやう見られ居候に今や一勢力しかも侮るべからざる一勢力として見らるゝに至れる一徵證として慰むるの外なき儀と奉

存候何か纏まりたるものを起草致して差上ぐる考へにて居候ところ意外の障碍多く甚だ不本意ながら期限を失し候次第恐縮千萬に御座候何卒御海容被下度奉祈上候本月中旬頃までならば何か差上げ得べくとも存ト候へども只今のところは鳥渡手放し難き仕事にかゝり實に申譯無之候匆々（十月八日）

●不幸の詩人、言論自由を奪はれたる詩人兒玉花外に寄する辭

小塚空谷

頃は我が明治の三十三年三月の中旬とか覺ゆ、魯國の警視廳は首府セントピータースブルグの各街區に布達を貼付して曰く

市街に立ち止まり談話するものは其何人たるを問はず三箇月以上の禁錮參百圓の罰金に處すべし

と、余は之れを一讀して、昔わが仁安の清盛が使役せし三百の禿童（あむろ）に京の市民互に目を側めて往返せりし、其の野蠻なる不幸よりも、今日のロシア市民は、尙ほ一層の不幸を、其が主權者より蒙らされつゝあるを感ト、轉た同情の慨に堪えざるものありき。

今魯政府が何故に斯く迄も無法極まる壓迫策を爲しゝかと云ふに、當時魯國の大學生等が參政權を得んと欲し、選擧權を要求し、君主專政の害惡を鳴らしゝに依れり、而も當路者の愚昧なる、更に彼等の言を容れず却つて其の行動を罰するに及びぬ。

於茲乎、暴を制するに暴を以てせよの眞理あり。遂に一學生は、慷慨悲憤の余り、時の文部大臣ボゴニーボクを狙擊して斃せり、尋で死文相の追悼會

催さるゝや、ガザン寺院に於て甚しき喧囂を惹起せり。之れ彼の無法なる揭示ある由來なり。

鳴呼何等の不法ぞや、○○○○○○○○○○○○

予は社會主義演說會に於て、我が警視廳の干涉に遭ふ每に、我が東洋の新文化國も、尙ほ北方强鷙の蠻國に劣れるものあるを思へり。四月三日に於ける大浦警視總監の措置を見るや、予は魯國當時の學生を忍ばざるを得ざるものありき。更に予は社會主義に執筆するのころ、其の擔任の文苑欄は、無學なるサーベル內閣の下に言論の自由を奪はるゝに及び、越えて、社會主義詩集の發賣禁止さるゝを聞くに至り、余は默せんと欲して默する能はざるなり、最早忍ばんと欲して忍ぶ能はざるなり。

鳴呼、我が愛する所の詩人花外よ。共に等しき災厄を蒙むれる我々は、ガザン大寺院內ボコニーボク會葬者中に混入せし、三千の大學生六百人の女學生が、血に飢ゑたるコサック兵と、奮鬪して死を恐れざりし、不幸なる勇健を追回して、相共に其の際彼等が歌ひし號哭を三誦せんかな。

其の歌に曰く

○○○○○○
○○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○○
○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○

○

安部磯雄

拜呈仕候貴著『社會主義詩集』發賣禁止せられたるに付き更に御高吟數種を集めて御出版被成候由就ては小生へも一言せよとの御注文、小生は勿論蕪言を呈する積に候ひしが平素多忙なるため全く失念して日限に後れ申候今更拙筆を採るも益なき事に候間此度だけは曲げて御宥恕被下度御願上候（十月六日）

○

青柳有美

人を是非するに臆斷を以てすべからざるは、三才の童子も能く之を知り、證據の不充分なるものは、天星の名に於てする法庭すら、また其訴を免す。

然るに、三才ならざる五尺の男子どもが、ウヂ〳〵と數多く寄り集まりて、テーブル嚴めしく控え給ふ大日本帝國政府内務省警保局圖書課の御役人樣たちに限り、概ね先づ偏癖なる臆斷を前提として、しかして後に圖書の檢閲に取りかゝらせ給ふものゝ如し。而して、その臆斷は先づ其實質を究めずして、其名に怖るゝより來る。予の『戀愛文學』の如き實に其名の故に發賣頒布を禁ぜられたるものなり。兒玉花外君が『社會主義詩集』の同ト〻近かく發賣頒布を禁ぜられたるは、蓋し又其名の故に因るものならんか。

又今の有ちゆる役人氣質に通融する一特質あり。卽ちアイロニーを解せざること是れなり。されば、役人の御仲間に漏れざる大日本帝國政府内務省警保局圖書課の檢閲掛樣も、文字の裏と表とに含まれあるアイロニーを讀む能はずして、たゞ文字をのみ閲みするが故に、其實左程ならざる言

句――否な寧ろ治安を益し風俗を改善する如き言句をも誤まり觀して以て治安に妨害あり、風俗を壞乱するものなりとなすなり。予が『戀愛文學』の如き全く實にお役人樣のアイヨニーを解せざる人種なるが故に發賣頒布を禁ぜられたるものなり。兒玉花外君が『社會主義詩集』の同じく近かく發賣頒布を禁ぜられたるは、蓋し又お役人樣のアイヨニーを解せざる人種たるに因るものならんか。

此くの如くにして、其著書の發賣頒布を禁止せらるゝに當り、悶々の情堪え難く遺憾骨髓に徹するは、素より之れが爲に劬(うみ)の苦みをなせる著者なり。予一たび之を實驗せるを以て、兒玉花外君が『社會主義詩集』の發賣頒布を禁止せられて、如何に悲憤の堪え難きものあるべきかを思へば、又自ら憤然たるものなくんばあらず。されど、更に忍ぶべからざるは出版書肆に對する氣の毒の情なり。書肆の損害や實に少々にあらず。兒玉花外君が、更に其の近什を聚めて一本を作り、これを其厄災を蒙りし金尾文淵堂に献せんとする芳志のあるところ、誰か感佩せざらんや。文淵堂たるもの、又以て大に慰するところあらんなり。（九月廿九日發賣禁止戀愛文學著者）

○

赤司繁太郎

謹啓秋冷の候に相成り候處筆研益々御清穆奉賀候、偖小生は新聞紙上に於て貴著社會主義詩集が發賣を禁止せられたりてふ記事を觀て驚き申候、其内容果して治安妨害を價するものなりや否やは未だ貴著を拜讀せざりし小生の知る所に無之候故敢て之を以て當局者の措置を是非することは小生の爲し能はざる所に御座候、乍去友人たる貴君に對しては一片同情の念禁ず難きもの有之候。基督教の一牧師なる小生の立場より考

へ候へば、基督の本旨人道主義を實行せんとするには今日の社會組織とは到底相容れざるもの有之候半かと考へ居り候、このことにつきては近日「基督教と社會主義」てふ題目の下に一篇の小冊子を草し世に問はんと存ト居り候程にて、社會主義をキリスト教と相容れざるが如く説くベーレンヅ氏やレー氏の徒、さては基督の徒と稱する日本耶蘇教界の多くの人士等、又キリスト教は社會主義と調和せずと論ずる一派の社會主義者等と其旨趣を異にする点有之、要するに小生は社會主義には大ひなる同情を表し居り候。貴君が著作にしてこの主義を歌ひしものゝ世に公なることを得ざりしをきゝては實にこの主義のために一滴の涙なき能はず候。然れども貴君は貴君が著作の發行を禁止せられたるにつきて尚ほ貴君がためには一の心強き点あるを發見し自ら慰籍せられて可然と存し候。現時日本の詩人文士てふ人々の作品を見るに、小生の寡聞にもより可

申候へども眞に天籟と感ずべきものも餘り見え不申、人心の奥底にひそむ靈の秘調を傳へんとするものも亦餘り見當り不申候。小生は美は善のための方便なりとは不存申候へども美と善とは自ら相契合する所ありと思考するものに御座候、從而小生の希望は彼等現時日本の詩人等が辿る所と異りて貴君が時代精神の動くを機微に察したまふよりして社會主義を歌ひ貧者勞働者の爲に憤慨同情の餘にいでし熱血ある詩篇に嘱望する所多く候、而して貴君の詩篇が當局者の忌諱にふれたるは却つて貴君が眞價のある所を思ひがけざる尺度に測られしものとして寧ろ喜ぶべきには無之候乎。

詩人は確かに一の豫言者なり、猶太の古代史を繙いて豫言者等が時代精神の動くを前知し、貧者、賤者の味方となりて時の當局者と相容れざる所ありしを思へば貴君も亦た自ら慰籍する所なしと云ふべけんや、幸に益

々この主義の皷吹者となり、傳播者となり以て萬代に渡る詩篇を歌ひたまはむこと、これ小生の熱望する所に御座候草々

（九月廿八日、名古屋東片端にて）

○

拜復

貴著社會主義詩集は世安を害するものと認められ曩に當局より其の發賣頒布を禁止せられ候由是非もなき次第とは申しながら御不本意の段御察し申上候

詩人としての貴君は常に社會の或る暗潮流の指道者として亦或る社會下層の或者の同情者として多くの熱情を吟詠の上に表示せらるゝは小

齋藤溪舟

生等の夙に知る處たり社會主義詩人に社會主義の詩あるは是當然の事にして其間何等の不思議もなし當局の此詩集を諱忌しゝ事や其意の何れに在て存するは今茲に之を忖度するの必要も無之候へども惟ふに此詩集を讀む者が其の情を激し其の心を紊し遂に怨嗟の聲を作して或は不穩の行爲もあらむかとの虞れあるものと認めたるにある可しと存ド候然れども斯は適當なる判斷なりや否やは別物として此詩集の發賣頒布を禁止して以て或る物を表示しつゝある社會主義の實行を隔絶する事を得ば此の社會主義の勢力は當局のためには至つて憊弱論ずるにも足るまゝきものなるべく候斯は兎も角此詩集の發賣頒布禁止は　界に於ける一の奇現象にして亦著者兒玉花外が詩人としての地位に於ける一椿事に御座候

扨此詩集の發賣頒布を禁止せる當局は今後尚ほ社會主義の詩を唱道す

ちむ兒玉花外に對して其の自由を如何なる程度にまで之を拘束し其の精神を如何なる程度にまで之を壓抑し得べきか是將た此詩集を吊した る小生等の偏へに眉を集め目を瞪りて監視せむと欲する所に御座候匆々頓首　（明治三十六年中秋）

○

佐治實然

社會主義とは何ぞ畢竟するに人類の間に博愛自由平等の三大主義を實現せんと欲するに外ならずと信ト居り箇人競爭の弊殆と其絶頂に達する今日此主義の勃興を觀るは天意の然らしむる所人力の左右し得べき所に非ずと被存候然れとも彌々社會主義が箇人競爭の弊を一掃し盡すまでには尚多少の時日を要すべく其途中に於て主義の爲に犧牲を要するとは勿論と被存候近時貴臺の經驗被成候事實は卽ち是れなりと申度存候古聖云く惡に敵するとなかれと我黨の士は此の高尚優美完全なる聖訓を服膺して主義の爲には死に至るまで忍耐せんことを祈る　（退歩居士）

○

坂井犀水

敬愛する兒玉花外兄机下

涙は兄が生命なり、泣き且つ歌ふことは兄が使命なり。多感なる兄が、從來世の不幸不遇なる人々の爲めに灑きたる同情の熱涙は、凝て哀切悲憤の詩となれり。まことや人の心の冷刻にして人の世の亡狀なる、暴悖、殘忍、奸譎の徒は富と名とを擁して社會の上部を占め、跳梁跋扈を恣にし、温良なるもの、正直なるもの、乃至力弱き者は、社會の下層に沈淪して彼等の虐待

を蒙りつゝあり。苟も人心あらんもの、誰か一滴同情の涙を流さゞるものあらんや、誰か一片悲憤の念を發せざるものあらんや。兄が詩は之を代表するの聲なり。今回兄が多年感慨の余り絶叫したる義憤の詩を集めて一卷となし、『社會主義詩集』と題して世に公にせられんとするを聞き、弟は實に屈指してそが誕生の日を待てりき。思ふに之を待ちしもの頗る多かりしならん。何等咄々の怪事ぞ、治安妨害てふ解釋すべからざる名目の下に、突然發賣禁止の災厄を蒙らんとは。兄が痛憾察するに堪へたり、弟も亦た切齒公憤を禁ず得ざるなり。然れども何の辭を以て兄を慰むべきかを知らず、そは余りに非道無理なる怪事なるが故に。

由來當路の吏員なるものは、全く常識を缺けるものゝ如く、其行動のトツピョウシなる、恰も常人が白癡の行動を解し得べからざるとさも似たり。而して一般民人の解し得る普通の條理は却て彼等の解し得ざるところ

なり。今ま將た何をか言はん。唯だ疑ふ、何の日か眞個の文明的政治が我國に建設せられて、自由の天地を現出すべきやを。眞に浩歎の至りなり。

然れども弟は信ず、赤誠は壓しつぶし得べきものにあらず、眞理は最後の勝利者なり。兄が不幸なる多數の民人に對して表する同情は、何者と雖とも之を壓制すべき權理あるべき筈なし。兄よ益大胆に猛然聲を放つて弱者と貧者との爲めに歌へよや。

見よ、火あり、燃へ揚れり、將た燃へ揚らんとしつゝあり、彼處に此處に、こは全地を燬き盡さずんば止まざるべし。之を消さんとして却て之を煽り立てつゝあるものあり。人道の大火は、かゝることにて消ゆべきものにあらず。愚かなることかな。兄よ勇ましく歌へよ、●命の詩を。

茲に神聖なる詩壇が俗吏の爲めに蹂躪せられたる此災厄を紀念せんが爲めに、更らに最近の詩篇を集めて公にせんの擧ありとか、弟は之を祝す

るの情に堪へず。願くは兄が詩に力あれ。而して到る處に人道の大義を宣傳し、暗き破屋の下に呻吟する人の子等に、慰勵の福音を齎らせよ。

（明治卅六年初秋、函根蘆の湖畔の客舍にて）

○

堺　枯川

花外君足下。足下の詩集發賣禁止に對し一言を寄せんと欲しながら、先月來殊に多忙の爲め其意を果さず、遺憾と失敬と二つながら限無き次第であります。然るに小生は此度社會主義の立場より對露問題に非戰論を取り、萬朝報の所論と合すると能はず、終に退社の止むを得ざるに立至りました。依て昨今始めて少しく閑暇を得て、何か一文草したいとも思ひましたが、モウ同情錄の印刷の間には合ふまゝと存じて、只御挨拶の爲め此一書を差しあげます。

御互樣に今後いろ〳〵の風波に遭ひ暗礁に乘りあげる事は十分に覺悟せねばなりませぬ。君乞ふ幸ひに自愛せよ。匆々頓首。

（東京の郊外角筈の里に於て）

○

木下尙江

社會主義詩集の出版禁止せられぬと聞きて莞然一笑、花外兄に寄す

誤て詩となす勿れ又た歌も思ふ勿れ是れ山男の心やりのみ

山風を、我は怨まゞ、櫻花、時ならなくに、散る影を、あかずも泣ける、夜半なくば、あはれ今年の、春のため、何をかたみと、君は見るらむ、

花散りし、木かけに立てば、月の東、

雲井もり來ぬ、涙の如く、

花外君に寄す

木崎好尙

花外兒玉君、僕いまだ君と文酒一夕の歡を交へず、その頃日新たに公けにせりしと聞ける『社會主義詩集』一卷、將た官府の認めて治安に害ありとし、突如發賣禁止の命を下せるを以てして、僕は遂に一寓目を果すをも得ざりければ、何等語句と意旨とのゆくりなくも忌諱に觸れしかを解するを能くせず。未見の君の未見の詩集、僕は何等因緣の其間に繫がるゝものなくして已まんとを憾まずばあらず。而して、今者『同情錄』の徵あり、僕は卽ちこれを透して、未見の君と相語り、未見の詩集に接するを得るが如き思あるぞ奇しき。

僕は近日諸詞人の贊襄を得て、井原松壽軒の爲にその遠忌を修し、席上彼が遺著を展列し、以て後日西鶴研究の緒を手繰り出さんとを謀れり。夫れ西鶴は明治聖代の罪人にてもあるべし、その遺書は飜刻本、校訂本の世に出づる毎に、輙ち風俗壞亂と認められて、發賣禁止の厄を蒙ぶるを例とせり。西鶴が所謂好色本は書中往々男女間の陰秘をかくさず蓋せず、明々白地に讀者の前にさらけ出したるものあり、宜なりお眼鏡の下に逃るゝ能はざる事や。然れども、西鶴が本領は、決して區々好色本の上のみにあらず、彼が後人に惠めりし社會相の幾多遺著は、肅秋霜の如く、嚴烈日の如く、微は絲毫の末に入り、深きは金輪際に徹し、一たびその卷に對すれば、縱横表裏時代の寫眞は歷々と吾人の眼中に映ド來るにあらずや。是に於てか知る、彼が男女間の陰秘をさらけ出せりといふもの、亦その深刻なる眼光、透徹なる筆力の不知不識の間に描き出しゝにありて、他の笑繪枕本の類と、

決して一例之を視ることを許されざるを、然りと雖も、彼が筆のすべりたる誤りは、二百年後の今日、矢張これを風俗壞乱と叱られて、二度と再び人間世界に面出しの出來ざるものとなり了りしぞ是非もなき。

今や、僕等が件の遺書を持寄りて、西鶴忌を修せんとす、或は風俗壞乱の書冊をふり廻すにあらずや、と早合點せられて痛くも無き腹さぐられずとも限らず、安心あれかし、僕等は、ゆめ官府の眼をぬすみて、自から快しとするものにはあらず、一つは西鶴其人の爲に無實の罪を雪がんとてなり、換言すれば好色本以外に、彼が本領を發揮せんとはするなり。

僕は、未だ君が世もおそろしき詩？を讀むを得ざりき、唯、人言を聞いて集中、危激に類する題目（大盤平八郎の如き）の厠はれりといふを知りて、僕は恰かも其例の西鶴集に、好色本を雜へたりしに由りて、官府の怒りを買ひしに同ドきを承知するなり。古の西鶴氏は、時代を描き盡さんとして、筆が

男女間の事に深入りし、今の花外君は現世相に泣き過ぎて、圖らずも世にはびこれる富驕兒、貪惏漢の敵と認められたる殘念さよ。

僕は曾て西鶴の爲に、その好色本を除きて、彼が集を秦火の餘に存錄せんに志あり、君は、今はた最近の詩篇を輯めて、更に世に問はんとすと聞く。蓋し危激に類する題目は、必ず之を繰返すまゝ、繰返さずとも社會は歌はるゝにあらずや。僕が君の心事を忖度する、其れ此の如し。知らず、君は西鶴に對する僕の入らぬお世話に、亦一掬の同情を寄するや如何に（九月廿三日）

壓迫

美なる憲法備はるも

これ空文か、言靈の
幸はふ國の司等は
自由を筆に奪ひたり

われ無才の子、利に奔る
末世の市にうらぶれて
禁へぬ思をせめてもの
歌に忘るゝ身なれども

弱者に迫る壓制の
甚しきを見聞いては
胸うち騷ぎ、手おのゝき

火炎わが身を出づると知る
蛇のともがら、はびこりて
女の巣をば襲ふ時
劔を執りて起つ子をば
罪の犯者と咎むるか

詩の貴きを得知らざる
凡下俗智の身をもちて
清き詩人の集の上に
朱點汚すはなめげかな

おゝわが友よ、怖るゝな
勇士駿利の矢を受けて
胸を血汐に染めたるは
これ戰陣の譽れなり

○

花外兄足下、曩に足下の愛兒『社會主義詩集』が、或る者の毒手にかゝりて、非命の最後を遂げたりし時、足下の血管は、定めし憤怨激怒を以て、張り裂けん許りなりしならむ、余は足下の性情に於て、必ず然るべきを知れりと雖も、當時遂に足下を慰むべき一言の辭をも發見し得ざりき、何となれば余も亦た足下と同ど感情に支配せらるゝを免れざりしを以て也

然れども今にして考ふれば、これしきの迫害に對して、吾々が早くも拳を固めて意氣捲き返るは、餘りに輕卒ならずとせず、足下、吾々を迫害する者の中には、不俱載天の者も無きにあらず、而かも此等は眞に少數のみ、彼等の大多數は、當に吾黨に與すべき人々たり、彼等が動もすれば吾々を斥罵し、然らざる迄も吾々を嫌厭するは、未だ吾黨の福音を知らざるに由る、彼等は愍むべき人々にして、決して惡むべきにあらず、吾々は昔の殉教者の熱誠と忍耐とを以て、吾黨の福音を彼等に宣傳せざるべからず、十年二十年は愚か、縱し百年二百年を要すとも、決して々々屈すべからざる也。

足下、吾々は無數の後援者を有す、若し夫れ吾々の憤怨を晴さんと欲せば、其事極めて易々たるのみ、吾々は一箇のマッチと一束の藁とを以て、能く此社會を灰燼と變せしむることを得べし、而かも是れ吾々の理想を遂行する所以にあらざる也、『社會主義詩集』發賣禁止の紀念として、更に新詩

集を公行するの擧ありと聞き、仍ち一言を足下に寄す。

三木天遊

○

現代社會は人類の不合理なる、不人道なる生存に外ならず、文明が贏ち得たる、科學が資し得たる、饒多の微妙なる天祿も(生活の多趣多福も)却て多數者の悲慘を成すに過ぎずして、其の歡樂を享け得る者は頗る少數なる範圍に限らる。最も醇粹なる人情を以てしては、思ふにも忍びざるべく、最も高貴なる觀念を以てしては、片時も安ずべからざるの、悲哀は一般に增加しつゝあり、刻々に釀成せられつゝあり、這は苟も常識ある者の肯せざらんと欲するも得べからざる事實にして、熱き涙と軟き心とを有する精神家をして、寧ろ娛しき(否寧娛しかるべき)文明を打棄て再び寂しき太古の狀態に復らんことをさへ願はしむるに候はずや、或は華やかなる情火と雄々しき心血とに充てる詩人をして、そゝろに神聖高貴なる半修羅半樂園としての封建時代を夢想せしめ、偶野獸的暴力を文明半面の實質として許さんと企てしむるに候はずや、泰西最近の平等思想、ロマンチシズム、ニーチエズム、帝國主義などは如何に聒しく我等が耳に謠ひつ說きつ叫びつするも、所詮其の意(こゝろ)は殆上記の二つを出でず、而して是等も矢張社會主義を養育する滋養物に外ならずと存申候能ふべからざるを望まんとする彼等は巖穴に在る人を前より押さんとするが如し、結果は却て前へ突進せしむるに過ぎざらん。されば社會主義其物の發生が既に殆不可抗力たるが如く、前記の文學が反感的にも激成する社會主義文學の發生も、亦同ト く殆不可抗力として現はるべきは、理の當然也と、生は既に久しく考へ候

さて今度君が詩集の禁版せられしは如何なる故か、勿論確とは知り得ざるも、其の社會主義を防壓せんの意志に出でしに非るべきは殆疑ふべからざる所なるべく生は如上の所見よりして、苟も文明國の爲政者が、時勢の必趨たり、自然の傾向たる所のものを、治安に害ありなど論ずる事が、更に一層治安に害あるを覺らざる迄に、世狀に疎からんを信じ申さず候。生は君の詩集を見ず候へども、當局は或特別の忌諱を君が詩語に爲しゝにて、社會主義文學たるの故に發賣を禁止せし譯には御座なかるべく存申候、生は此解釋(寧推量)よりして、君が、或は爲に餘りに憤激するとなからんを望む者に有之、寧君に勸めて嘗ては文壇の寄食者とさへ人の惡い奴の噂し候新体詩の、今は兎も角も國家社會の治安を害する迄の勢力あるものと認めらるゝに到れる事を相共に慶賀せんと欲するものに候

病める身は雨などには寒き迄の秋と覺え候、ものいへばの唇のみならず君が枕の秋風にも尙暖からんを願ひ候(博覽會にて知りそめし天遊猶松)

狂風詩

南の空を暴れ出でつ、
南の空を暴れ出でつ、

嗚呼狂ふ風、狂ふ風。
雲を貫く大木も、
空に聳ゆるたかどのも、

濁血高く吼え哮る、

宇宙庵幽明

北の空へと狂ひ行き、
北の空へと狂ひ行く。

獨して暴れまた狂ふ。
根こぎとなりて横はり、
微塵となりて碎けたり。

あはれ富豪の昨日まで、

乙女の節蹂るべく、
頼みし財捧げつゝ、
ぢう〳〵と一しきり、
黄金は飛びて空に舞ふ。

かゝる生死の際にだに、
怨めしげにも其の行方、
またうゝ〳〵と一しきり、

飛べる黄金の吝しかるや、
見送る耳に聞ゆるは、
風の笑の凄ましや。

○

詩は思想の花也。花開いて風雨多しといへど、そは嫉み多きうつゝ世のと

弱のしゝむら屠るべく、
神の救を祈る時、
そがたな首を吹く風に

病不孤生

と思ひしに、何ぞ料らん、詩園亦この嫉風妬雨あらんとは。傷心に堪へず、一書を寄せて私憤を漏らさんとすれど、二竪われをして筆を執る能はざらしむ。乃ち短文を草して吾兄の災厄を見舞ふといふ。

（湘南客舎にて褥中仰臥書）

○

兒玉君、君が『社會主義詩集』は發賣禁止の厄に遭へりとか。今更ながら所謂其筋の忌諱なるものゝ、まことに奇鬼にして突如天外より落下し來る如くなるにはおどろかれ申候。されど、小弟は君に向つて、詩人としての君に向つて、こゝにとかくの慰問の辭を呈せざるべし。西鶴をとがめて春水を容るゝほどの其筋の發賣禁止なるものが、詩人たる君に對して何の災

柏蔭生

禍にて候はんや。一行政處分によりて迫害をうくるほどに詩人の天職は微弱なるものにてはこれ無かるべく候。たゞ氣の毒なるは書肆に御座候。さすがに愛兒を失へるにも似たらんほどのかなしみはあるべき詩人ならざる一兒玉君の衷情に御座候。匆々不備　（九月）

感而即記

平木白星

白星問ふて曰く、「足下は社會主義を理想とせらるゝや、又この主義を社會に實現する事を期せらるゝや」。

花外答て曰く、「然り」。

白星再び問ふて曰く、「足下の著『社會主義詩集』は社會主義宣傳の手段として作られたるや」。

花外これに應じて曰く、「然り、予は社會主義を一の宗教として信奉するものなり、足下請ふこれを諒せよ」。

以上の問答は詩友兒玉花外の新著『社會主義詩集』が奇禍に罹るの報があるや、著者花外の眞意ある所を余が問ふて、花外がその問に答へたる私書の一齣である。兒玉花外は此の如き社會主義の人なので、彼が猶豫なき答辭はかくの如く壯んであつた。

世には一派の論者があつて、『社會主義詩集』發賣禁止のことに關してかういふことをいはれてゐる「詩人若し社會主義を歌ふ塲合ありとせば、それはたゞ社會主義に同情するに過ぎない、同情して而して謠ふに過ぎない、その主義の實現せられ、もしくはせられざる如きは、詩人に於て何等の關する所があらうぞ」と（明星雜誌參照）。幸なるかな、我が詩友兒玉花外は社會主義の詩を作つて、而もこの主義の實現を希望しないやうな、そのや

うな輕薄な藝人ではあらなんだ。

九月十四日の官報を見て、內務省の告示第五十七號といふに、『社會主義詩集』は安寧秩序を妨害するものと認められてある、其刻板印本をまで差し押へられたといふことを知つたものゝ誰が驚き呆れなからうか、この事を聞きて失望した人は恐らく余のみではあるまい、然し余は啻に失望して止みはせなんだ、更に想ふた、更に想ふて破顏微笑したのである、更に想ふて何故かくの如く多少悅喜の情がこの胸に溢れたのか、それを秩序なく思ふがまゝに筆の趨くがまゝに書けばまあ斯うだ。

二

我が詩友兒玉花外の過去の歷史は、苦鬪煩悶の多趣味なる記錄であつて、現在に安んぜざる彼の思想と、窮愁憂憤の境遇とを有せる彼が、安立の地盤を社會主義の中に發見するやうになつたのは必然の結果ではないか、彼が俊邁痛快なる筆を揮つて、この主義を提唱し、夢むる人を呼び醒ましし、世を搖り起こさむとするのは正當の順序ではあるまいか。社會主義を皷吹するに適當なる詩人は、我が國の文壇、彼の外に誰があらうぞ、社會主義は彼に於てよき味方を得、兒玉花外はこの主義に依つて良き詩題を得たといふべきである、社會主義を宣傳することが花外の天職とせば、彼の天職何ぞしかく雄大壯烈なるや。

三

『社會主義詩集』は何故に忌諱に觸れたのか、詩歌は社會主義を謳歌することがならぬといふのか(一)、書名が世間を驚かさむことを恐るゝに依るのか、(二)、花外の詩は情想あまりに放縱自由なるに依るか(三)、抑々この三つの外の何が發賣頒布を禁ぜらるゝ理由であるか。

兒玉花外は余が親友某に書を與へて曰く、「この詩集を禁止する如んば、詩にては國家の事も政治の事も謳へず、詩は洵に狹きものと存候、詩人の筆を縛し口を箝するものにて候」と、

花外が言ふ如くに我國の役人衆が詩は社會主義を謳ふ能はずといはゞ、彼等は詩人の筆を縛し口を箝するのみで無い、我等の自由意志を束縛するのだ。至微至小なる人間輩が神聖なる詩に垢つきたる爪を觸るゝこの無遠慮はどうだ、彼等の無意味なる干渉は余輩の含忍する限りで無い。

詩友花外よ、自由の大日輪はかくの如くして我が目前に沒せざるべからずとせば、將さに「文明」の石と「正義」の鐵とを曼々と相捄ちて一の火を作らなければならぬ、その火とは何ぞ、曰く公憤。

我等の詩は單なる藝術では無い、それに政府の役人衆が一知半解なる審美哲學者の口吻を倣ひて、詩は藝術也、藝術は啻に藝術なるべし、主義ある可からず、傾向ある可からず、人生を觀察すべからず、詩人自身の人生觀を抒述すべからずといふにあらば、其審美論や十七八世紀のそれであつて、其精神や要するに淺薄輕浮である。詩人が詩を作らんとするに到る心機は隱微復雜、豫め一定の規律を以て推すべきでない。もしこれを窺ひ知りたくば、精一精、深一深、更らに愼重なる研究があつて欲しい。

詩は詩である、感情の聲がそれだ、一言以てこれを罄さば理想の美的發現がそれだ、詩を撿束する何ものも世にあるべきで無い、國家主義をも社會主義をも全人類主義をも、謳ふて唱へて高く叫ぶに何の容赦があらうことぞ。中にも社會主義と美との關係の至つて深いことは先覺者の多く舊く且つ大に唱へてゐるではないか。花外が時と人とに切なる社會主義の思想を詩としたのは頗ぶる當を得てゐるのである。

詩は道樂では無い、贅澤ではない詩は作らざるべからざるが故に作る

のであつて、作らずともよき道樂ではない、有らざるべからざるが故に有るのであつて、無くともよろしい贅澤品ではない、詩は單なる藝術と見たは五十年百年も昔のこと、詩は社會主義を謳歌すべからずと制限を設く權能は今の時抑々誰にあるか。

五

詩人は社會主義を唱道することはならぬなら、ウイリヤム、モリスはどうか。彼は自ら社會主義者同盟會（ソシアリストリーグ）の盟主として、この主義を皷吹するに一生を猶且つ短かしとしたではないか、世に彼を詩人と呼ばざる誰人があるか、ジョン、ヘンリー、マツケーは自ら無政府主義（アナーキズム）の詩人と稱せし程激烈なる主唱者であつたが、世に彼を詩人と呼ばざる誰人があるか。豪宕の氣一世を風靡し、超邁の慨今古を凌ぐ底の社會主義詩人が、日本に一人ぐらゐあつてもよいではないか。これあることを寧ろ誇負してよろしいのである。

六

詩友兒玉花外の著書に『社會主義詩集』と名づけたのは、世間を驚かすものであるから、これが安寧秩序を妨害するのだといふのか、換言せば、其內容の如何は、措きて題名が治安妨害だから發賣を禁止されたのか、若しそうなら余はこれに對して言辭を費すことのあまりに愚なるを信ずるのである、然しながら、現世には虛誕らしい眞實がある、これも其一かも知れない。我國當局者の遣り口としてはさも有りさうなことで無くも無い、果してこれが事實なら言語道斷、余は花外が詩集の題名を撰ぶに拙なりしといふのみで何も外には語るまい。

七

彼のハウプトマンの劇詩『織匠（ヂーハウエーベル）』は、社會主義增長の虞ありとて、獨逸國

政府の爲めに其が興行を停止せらるゝや、狡黠なる小興行主は『織匠』に似て非なる社會主義煽動の劇を四方に演じ、世間の好奇心を挑發して俗衆に一の感銘を與へたと聞く。我が國にあつては、彼の小興行主の如く、一人一商社の利益の爲めに『社會主義詩集』に似て非なる『社會主義小詩集』若くは『社會主義小々詩集』を發刊するものはあるまいが、『社會主義詩集』發賣禁止の反動で、この事を憤慨する輩に依つて『社會主義大詩集』が續々發刊せらるゝやうな事があつたらどうか、かくの如くして原燎枯草を燒くが如く、其主義四方に傳播蔓延されたらどうか、兒玉花外は自身の詩集を犧牲として、却て大に彼の主義を擴張せしめた榮譽を荷ふことではないか。

題名に依つて花外の詩集を禁止する如き輕舉は、花外の詩集命名が拙なりし丈けそれ丈けに役人衆の處措も巧妙とはいへまい。

社會主義の如きは、今日に在つてはさのみ奇闕嶄新なる怪的思想ではない、寧ろ穩當なる說理である、これを吟唱する詩が出でたりとて何を驟かに狼狽する事があらうや。

八

詩友兒玉花外の詩集の發賣禁止となつた理由を、熱烈なる彼の詩の情想が極端に走つた故だとしたらどうであるかといふに、それも發賣禁止の理由とはならない。

花外の書簡に依つて見るに、『社會主義詩集』中の詩は既に『東京獨立雜誌』或は雜誌『社會主義』に一旦掲載せられたものであるさうなこれありとせば、今更事新らしく激烈だとか强硬だとかいつて禁止するのは不當といはねばなるまい、どうか。

若し『社會主義詩集』のうちの詩が、安寧秩序を紊亂するなら同一の詩

は何故に前記の雜誌に公載せられた時に於て安寧秩序を紊亂しなかつたであらうか、今日これを禁ずべきであるならば昨日已に假借無く禁遏すべきではなかつたか。當時に於て役人衆がこれを見洩したりとせば、それは失錯である、譴責ものである、手續書ものである。余は我國の行政官吏に今少し眞面目ならむことが望ましい。

一たび他の雜誌に公刊せられたるは既に世を濁歩すべき權利を與へられたものといはゞいはるゝ、かくの如くして得たる權利を突然に褫奪せらるゝは、既得權の侵害でなくて何か、況んや詩は詩人の生命だ、日本の役人衆は箇人の既得權を侵害し詩人の生命をまで奪はうとするのだ。

九

さて、是に於て役人衆が、何かの口實を設けて答ふるとせば左の如くであらうか、成る程、この外に辯護の方法は恐らくあるまい。

曰く「本官等は、兒玉花外の新體詩が、東京獨立雜誌等に掲載しありしを知る、然しながら如何せむ、當時にありては、本官等に讀詩眼なかりしなり、故に其詩が安寧秩序を妨害するや否やを判斷する能はず、新體詩と社會とは、風馬牛相關せざるものとして、油斷せりしが、今日に於ては稍々詩歌を了解する趣味と觀識とを得てければ、一讀再讀これを會得して初めて其詩の潛勢力案外に多大なるを察し、これではならぬと考へて事こゝに出でたるなり」云々と。時世はかくの如く一進歩したるなりき。

この自白は要領を得てゐる、かう大膽に正直に答へられたら答言として遺憾は無い、然し當局者にこの答辯を敢てするやうな曖濁なる襟度があるかどうかは疑はしい。

余は以爲らく、内務大臣、兒玉某が、内務省告示第五十七號を發布せむとするに方つては、必ずや彼と家祖を齊ふせる同姓花外の詩を、一々熟讀翫

味したのであると、かく信ずるのは不條理ではあるまい。余は兒玉大臣の新體詩を解し得し頭腦を讃美するのである、新體詩は社會裏面の勢力なることを彼が看破し得たのは遲くはなかつた。

兒玉花外が『社會主義詩集』を作り得たことは名譽である、彼の詩が陸軍中將兒玉某をして戰慄せしめたるは更らに名譽である。詩集を發賣禁止されたる爲め、新體詩は社會の一勢力なりしことを世に知らしめたのは更らに更らに名譽である。兒玉花外は新體詩史の一新時機をかうして劃したのである。

十

從來新體詩は「小六ケしく」て世間斗筲の輩には「わからなかつた」、これを知らずして衆俗から少なからず嘲笑詆嗤された、社會に重視されなんだ然るにこの一二年の間に勃然として活動し初め、種々なる事實に於て社會と密接に交渉するやうになつてから、思想的勢力の大なるものとなつたのである。

余が曩に『社會主義詩集』發賣禁止の凶報を得て、一たびはこれを悲み、再びこれを悅喜したのは、內務大臣兒玉某を初め其他の役人衆が新體詩を讀みて理解するに到りしといふこと、それが一、新體詩の社會に影響することの大なるを世間が知り得たる、それが二なので、政府の役人衆までがかくの如く新體詩の趣味思想を解し詩の勢力を知るやうになつたのは、詩運勃興の機運將さに眉捷の間に薄りつゝある一の證據なればこれを歡ばずにはあられなかつたのである、余の歡喜を是なりとせば花外も自ら慰むべきではないか。

詩友兒玉花外よ、地なるヴァルカンよ、猛火の司主なるヴァルカンよ、勞働者の保護神たるヴァルカンに比すべき詩友よ、余はこの一氣呵成の短

文を終るに臨みて、汝の手なる槌を揮ふにいよいよ自由ならむことを禱りに禱るのである。

積弱不振なる詩界には活氣を與ふべく、迷ひ迷へる社會には人の據るべき道を敎へむとせし詩集は、嗚呼何時又余輩が眼に映ずることであらうぞ（十月二日）

○

薄田泣菫

花外兄足下

此程より稻の香たかき岡崎の里に靜養し居る身の、足下の新詩集が治安に妨害ありとして、發賣を禁示せられしを傳へ聞き候節は、またしても爲政者が文藝の獨立と威儼とに要なき手出しするよと、憤ろしくも存せしが、故は御集の名に『社會主義』の四字を冠らせしが爲と承はり候ては、渠等が詩を文字通りに解するだけの能力も無きを寧ろ不愍に存ずるやう相成り候。社會主義の事は今は暫らく申さず、唯これを怖るゝ事鬼にも似たる今の爲政者の前に、斯の四字を冠らしめたる御集は稍挑撥と揶揄とに過ぎたるものありしかと存ず候。

詩歌は生命の泉に候、民草の心に注ぎて優しき潤ひを與へずんば、こゝは遂に不毛の國と成り果て候べし。君がさきの泉を塞ぎし若き人達は、性愚かにして、誤りて其境に踏み入らんとするもの、詩歌が濟ふべきは、先づこの輩かと存ず候。君が海の如き寛容をもて、この泉を穿たれ候御心も他ならざるべきを推し候、これに掬まば其味酒の如くに甘く候ものを。

醋は酸きに候、酒は甘きに候、これだに知らば嘗味に間違ひは無かるべく、爲政者をして作物を文字通りに解せしむるは、文藝の獨立と威儼とを保

たん第一歩かと信ト候、いかゞや、匆々。（卅六年神無月第一日洛東岡崎の里にて）

○

鈴木皷村

御發行の詩集、その筋の御法度に觸れて、板木召し上げられ給ひし由、ひとたびは愕き申候、されど思うても見給へ、

社會の現象は大なる樂曲の音譜の上を辿るがごとくなることを、

今の兄が御境遇は、最低の音部を神の御手に奏でさせたまふときに候へば、やがては高部に音符上昇するは必然に候べく、其間或は緩く春の潮のごとき時も候はむ、或は復雜にあらしのごとき時も候はむ、

樂曲のおもしろきはそこらに候、あまりに坦々たる太鼓の調べのごときは、平凡聽くに値なきものに候はずや、（琴糸切れて柱飛びしとき）

明治三十七年一月廿五日印刷
明治三十七年二月一日發行

金三十錢

不許復製

著者兼發行者　大阪市東區南農人町二丁目番外三四原田方　兒玉傳八

印刷者　大阪市東區本町一丁目三十番屋敷　鬼頭捨吉

印刷所　大阪市東區本町一丁目三十番屋敷　株式會社大阪國文社

發賣元

大阪東區南本町四丁目　金尾文淵堂

東京神田區表神保町三　東京堂

文藝圖書一覽

文淵堂の業務要項

出版

弊堂は專ら文學宗教書類の出版に從事し、材料の精撰と印刷裝釘の鮮麗堅固を期す、聊か世の出版業者流と其撰を異にするを信ず

原稿歡迎

故に親疎に不拘、紹介の有無に關せず、著者の聲名の如何に不拘、弘く有益なる原稿を歡迎し、眞情を以て其相談に應ずべし、希くは大方の諸賢幸に高顧を玉へ、其世に稗益ありと認るものは何種を不論之が出版を爲すべく、尚原稿を送附せらるゝ場合には、返稿返信及書留料を添附し、原稿は必らず書留郵便を以て送らるべし、定期刊行物に對するものは各其規に從ひ玉ふべし

印刷製本

弊堂は弘く各種の製版印刷經驗と便宜のあるを以て今後之が調製の引受を爲し、余力の盡し得る限り大方の便宜を計らんとす其手數料の如きは頗る僅少に只其實費の範圍を以て應ずべきを以て此事に經驗なき人には價格の安廉と非常なる便宜とを與ふべきを信ず、其要項左の如し

活版木版寫眞版コロタイプ版石版銅版の印刷
書籍雜誌其他の印刷製本
和洋各種の製本

賣買

弊堂は百般の書籍雜誌の發賣に從事し其新古を論せず弘く之が需要に應ず、尚各地出版者の其發賣方を托せらるゝあらば懇切に非常なる勵精を以て之が擴張を計るべし

注文注意

弊堂に注文せらるゝ方は著者書名册數其他の要項を尤明瞭に前金を以て玉はんことを要し、問合は返信料の封入を要す、取調は正確に、且て百般の書の調はざるなく、迅速に大方の便宜を計るべく、定期刊行物の發送は尤正確迅速を期すべし、送金は銀行爲替、郵便爲替（受取人欄内に小店名の記入を要す）郵券代用（一割增）各種其便宜に從ひ玉ふべし

市内注文

は電話、端書にて報せらるれば、即刻配達、大に大方の便宜を計るべく、（乙）宗教書目（丙）百般の新古書目は近日發刊すべく、本書と共に二錢宛の郵券封入者に送呈すべし其他書籍商百般の業務は尤も懇切正確に勵精すべく、愛に伏して大方諸賢高顧を希ふ

薄田泣菫氏新體詩集

ゆく春

製本頗美麗
金四拾錢　郵税四錢

これは薄田泣菫氏の長短五十篇の新體詩を集めたるものに候挿畫には滿谷國四郎君の彩筆になるコロタイプ版數葉ありページの色刷輪廓は工學家松尾素濤君の新意匠に成り候へば見ては眼に美〻く誦みては心に清き慰藉を理想を與ふべしと信じ候書肆は斯樣の書を諸君に勸むるに遠慮を要せずと存じ候

暮笛集

製本頗美麗
金四拾錢　郵税四錢

暮笛集の三版は体裁を改め工夫を凝らしたる新意匠を以て現はれ候卷中の詩も作者少なからず朱を加へ候ゆゑ自然面目を新たにしたるもの有之候はんと存じ候世の事物の日を經れば陳くなり行くが中に詩歌のみは常に新ら〻く美〻く候幸福なるは詩集を携ふる人と存じ候まゝ書肆は諸君に暮笛集を勸め候

菊池幽芳作小説書類

某書伯書

小説 祕中の祕

上下二卷　近刊

祕中の祕は
祕中の祕也
天下の人目を
新らたならしむるは
此祕中の祕也

寸珍頗美裝（下村爲山畫伯）

廣瀬勝平畫
坂田耕雪畫

小説 七日間

上下二册　一册四拾錢　郵税四錢

こゝに最も美にして最大膽なる最も狡猾にして最も機敏なる絶世の一佳人あり六尺有餘の男子一燃一醒せられつゝ相共に生死の境を彷徨す讀むもの心膽を寒ふせずんば止まず讀者を微せしめ其最後まで讀了せずんば安んずる能ざらしむるもの蓋し本篇の如きは無からん

よつちやん

金四拾錢　郵税四錢

よつちやんは今年五つの女の兒で著者菊池幽芳君の令孃ですが少しの虛飾もなく眞率なる溫かき同情の筆を以てゆの平生を詩的に書れたるものでよほど趣味の深い册子です兒童研究に志ある人には善き參考となり世の母たり妻たるものには如何ほど興味深く感せしむるでせうハ恐らく一度この本を繙いたものはよつちやんの面影を長く忘れることは出來ますまいそれにこの册子の體裁の可憐に美くしい事はたしかに出版界を驚かすに足るべきものと固く信ずる處です

中村春雨作小説書類

第八版發行

無花果

一條成美畫

菱靡沈滯せるわが文壇に聊か貢献する所あらんとの目的を以て大阪毎日新聞が夙に金五百圓の賞を懸て小説募集をなすや多數應募の佳什の内撰評者博士内田魯庵氏外三人大家の審査に依て第一等に當選せる紅葉山人の作は在來の尾崎紅葉氏の無花果也、此作は材を宗教に取りて人生の衝突を描出せるものにして春雨氏の陳腐なる舊套を脱し情と信仰との葛藤を主人公の悲劇が及ぼす厚珠の如き女主人公の溫情と共に遂に和氣藹々たる心の復活天地となりゆく、光明小説に依り希望と共に樂天的の傾向を帶びたる好なる讀物なり子弟も讀むべく、教育家も宗教家も共に讀むべく父兄も讀て熟讀を價するもの也

一册金四拾五錢　郵税八錢

短編小説

雛鳩

一册金四拾五錢　郵税八錢

目次

干蘭盃會。吾林。雜り種。片男浪。追羽子。けふ一日。もつれ糸。雛祭。白妙塚。娘氣質。癈村落。繪畫哲學。ちぎれ文。天神橋。自然詩人。尼のゆくへ。つゞれの錦。浮沈。わが罪。二本松城。鐵道馬車。妹山。鑛脈。月の船歌。病犬。

某書伯書

小説 密航婦

一册金四拾五錢　郵税八錢

一個可憐の一少女あり、母の慈愛の膝を離れて長崎に年季奉公せんとす、船中一慘事あり、はなくも身は是西伯利亞闇黑に醜業婦たらんとさ、……

諸大家新體詩集

半月集

湯淺吉郎著
湯淺一郎畫

大西祝書翰

金三拾五錢
郵税四錢

半月集は出でたり學者として有名なる半月湯淺吉郎氏の本書はヘブリウ學の名の明治新体詩史に缺ぐ可らざる位置を有するは夙く已に『早稻田文學』記者の評せ〜所本新体詩集なり氏が名の明治新体詩史に藏めたる古英雄の如きは外山井上諸氏の『新体詩抄』に先つ數年の創作にかゝり材を舊約の傳説に採り英雄エホデの事蹟を歌ひたる叙事詩にして無慮千行聲詞莊麗雄健汪洋として大河の海潮に注ぐの概あり眞個明治詩界破天荒の大作として許さるべき也此他崇高なるものには天地初發、黄泉門、七雷、神子と題して温籍なるものには愛犬、天然、新婚旅、秋田家あり滑稽なるものには百猿舞あり猿に寓して諸諷を出し諷刺の妙を極む民衆が信仰思想の喧〜く論ぜらるゝ今日基督神學者として深邃の智識を有する氏が新体詩集を得るは徒に詩壇の幸福のみにはあらざる也表紙畫帙畫は氏の令甥湯淺一郎氏の彩筆に成り詩と相俟て幽麗の妙を極む

春くさ

第一集　金十五錢
郵税不要

新作の新體詩、美文俳句和歌を蒐む、歐米の名畫を紹介するもあるべし、第一集には佛國プレトンの畫を口繪、に十葉の色刷畫を挿み、薄田泣菫、三木天遊、高安月郊、山本露葉、桑田春風、河井酔茗の長短の新体詩十二編と水落露石の俳文とを蒐む

塔影

河井酔茗著
長原止水畫
三宅克己畫

新刊

全一冊　金參拾錢
郵税四錢

序

人は都會を造り、人は田園に生れて、都に移れり。幼く〜て詩を作すに苦悩なく、後ち憧の書を讀んで筆を行るに忽ち澁滯す。今第二の詩集を編むに當りて糊塗の痕の多きに驚く、吾感へる哉

金曜日の夕

酔茗生

（品切書目）

詩集片袖

自第一卷
至第四卷

高安月郊著

夜濤集

全一冊

春雲集

全一冊

右何れも近日再刊高需に應ずべし

諸大家韻文書類

與謝野晶子女史著
藤島武二畫

新刊

小扇

金參拾五錢
郵税不要

みだれ髪

三版

金參拾五錢
郵税不要

落想に聲調に變幻百出〜て、獨創の妙才優に一生面を開き、之に盛るに紅恨紫怨纏綿懊惱の情熱を以てするは晶子女史の歌にあらずや變に『みだれ髪』の著あり、洛陽の男兒、才調に驚いて顔色無からんとせ〜もの、今又此新作『小扇』を得て如何の感ありや

子規俳句全集

上卷新刊　一冊參拾錢　郵税四錢
下卷近刊　一冊參拾錢　郵税四錢

子規子去つて爰に一年、人皆これを惜〜み人皆子規子か句を唱す、憶むらくは此句集なき也、月村子苦心蒐錄七千余句を四季折々の季の下へ分載〜て諸兄が下にす、む

與謝野鐵幹著
（品切近日三版）

むらさき

金參拾五錢
郵税四錢

今や國詩革新の潮流頗る急なるに當り、江湖の才人乞ふ本書に依つて更らに發明せらる、あらば幸也、歐米の『珍本』を參酌〜て奇拔なる製本の体裁、先づ人目を一新せ〜む

芭蕉
蕪村子規三家眞蹟　下村爲山畫

蟬しぐれ

春くさ第二集
一冊
郵税共貳拾錢

本書は天保以後腐敗〜盡せる俳句界を一掃〜て新趣味の皷吹に努め明治文學に俳句あるを知ら〜めたる子規、鳴雪氏等日本派百家の最新夏季類題俳句集也表紙及び挿繪は下村爲山氏の彩筆に成り句と相俟つて瀟洒の妙を極む青山綠り濃るが如く杜鵑聲頻りに落つるの頃這箇『蟬〜ぐれ』を繙いて詞人が清寂の想を忍ばゞ一味の涼は先づ吹いて諸君が襟懷に入らむ

諸大家文學書類

米光關月作　廣瀨勝平著

小說　薄墨の松　一冊　參拾五錢　郵稅四錢

先年大阪毎日新聞が賞を懸けて小說を募集するや應ずるもの百數十種。選者の嚴正なる審査により當選の榮を荷ひ〜好小說二個、第一等は中村春雨氏の『無花果』にして曩に弊堂が美裝〜て刊行せ〜もの、、幸に大方の賞揚を受けて八版を重ぬるに到れり、而〜て第二等は實に米光關月氏の『薄墨の松』本書乃ちこれ也材を先人未發の境に取り着想奇拔筆致清婉近來の佳作と〜て推すを躊躇せず清榻の下一讀の榮を給へ

浩々歌客著　下村爲山畫

詩國小觀　一冊　金參拾錢　郵稅四錢

出門一笑　一冊　金參拾錢　郵稅四錢

「老僕とわれ」「野花」「風頭語」「賣花翁」等小品文數十を集め一篇無韻詩といふべきものなり紀行あり「讀岐名勝」の如きは好箇詩趣に富める讀岐の案内記なり「向上一路」「啓行」「勾花」の如きは人生觀のある所を見るべ〜蓋〜著者の詩想は理趣に饒むを以て長と〜抽象に過るを以て短とすその人生と自然に涉りて一味の詩致感興深きは今日の文壇に在りてまた一家獨得たるを失はずといふべ〜卷末に康有爲の大同大平論あり南海の哲理の一斑を紹介〜たるものなほ著者が理を好む所を見るべ〜（大阪朝日新聞批評）

（殘本僅少書類）

	正價	郵稅
●小說　重盛（高安月郊）	參拾錢	四錢
●小說　金字塔（高安月郊）	四拾錢	四錢
●小說　青燈集（十大家作）	五拾錢	四錢
●明星畫譜（諸大家畫）	壹圓	拾錢
●菅公實傳（水谷不倒）	卅五錢	四錢
●菅公論（梅澤和軒）	參拾錢	四錢
●提督　ぺるり（米山梯吉）	參拾錢	四錢
●芝蘭集（新金蘭薄）	貳拾錢	四錢
●大阪名勝圖會（第一篇）	四拾錢	不要

諸大家執筆

雜誌　**小天地合本**　自一卷至三卷　廿五冊合本　全三冊

代金貳圓也

小川煙村作　某畫伯畫

社會主義　近刊

小說

勞働問題

一冊　金三十錢　郵稅四

壬寅の冬、讀賣新聞賞を懸けて天下に小說を募るや、諸秀才の爭ひ應ずるもの二百篇、各長あり、得あり能あり、才あり、萬目環視の間、文壇の泰斗幸田露伴先生の選定に依りて、此逐鹿の最優勝者は本篇勞働問題と定まりたり、勞働問題は是れ新世紀の大問題なり、舊世紀に於てカアライル即ち叫號〜、ラスキン即ち唱道〜、トルストイ即ち敎示せり、今著者大膽に提〜來つて自家の見解を述ぶ、蓋〜尋常者流の小說の比にあらざる也、殊に著者煙村氏が數年來潛に專念碎心研鑽を試み且つ猶試みつ、ある人生の解釋は、熱情ある、筆によりて其一端を此處に展示〜居れり、されば本書は獨り勞働問題の小說にあらず、又た人生人道を說明する小說なりと知るべ〜乞ふ群小說を離れたる本書の眞價をば細密に正當に翫味せられよ

發兌元　金尾文淵堂

小笠原譽至夫主幹

毎月二回

評論之評論

毎月五日廿日二回發行
定價一部郵税共五錢
廣告料十八字詰一行金五十錢

發行の趣旨

戰爭類社會習は人大悲慘なり、而して是れ文明史乘の最大汚辱なり、吾人は心を竭し力を盡し以て戰爭絶廢の理想を現實ならしめんとを期す、勞働は神聖なり、遊惰は罪惡なり、若し夫れ無職無業、毫も社會の進運を補翼せざるの輩は正に是れ人類社會の惡魔なり、吾人は須らく之を絶滅せざるべからず、

朝に臥床を起出で若くば夕に其靜眠に就くの時、吾人は必ず虛心擔懷以て默思すべし、蓋し默思は安慰と進歩を得べき眞の道なればなり

發行所　大阪市西區北堀江下通四丁目八十九番屋敷　評論之評論社
（電話千七百拾番）

日本に於ける社會主義の著書

片山潛著
●我社會主義　定價貳拾五錢　郵税四錢
之れ著書が二十年來確信唱導する主義の發表也。日本に於ける偉大なる社會主義者が宣言の、如何に熱烈なる乎を見よ！。

片山潛著
●都市社會主義　定價　郵税　同上
歐米諸都市の研究を參照して、我國都市焦眉の問題の解決を試むる、都市死活問題に關する最有益の眞面目なる著述なり。

片山潛著
●英國今日の社會　割引特價四拾錢　郵税六錢
著者の實驗に基き、英國の社會事業、慈善事業を詳記したるもの、有益なる研究たるや必せり。

片山潛著
●普通選擧　定價拾五錢　郵税四錢
簡明に普通選擧の何んたる乎を說けり。

片山潛著
●ラザル傳　定價拾貳錢　郵税貳錢
獨乙に於ける近世社會主義の始祖、熱血男兒ラザルを縱横に評傳したり、近來の快文字。

片山潛、西川光次郎共著
●日本の勞働運動　割引特價貳拾錢　郵税六錢
日本に於ける勞働運動の起源より說き起し、今日に至る迄の活動の模樣を詳細に記述せしもの、勞働問題を云爲する者必讀すべきの好著たり。

西川光次郎著
●社會黨　取次定價貳拾錢　郵税貳錢
歐米各國社會黨の最近況を報ず。

西川光次郎著
●カールマークス　取次　郵税共拾五錢
獨乙社會黨の首領リイグフチヒトのマークス傳に基き快男兒マークスを傳せり

西川光次郎著
●ジョン、バーンス　定價拾錢　郵稅貳錢
英國勞働界近代の偉人バーンスを、著書獨特文字を以て活躍せしめたり。

西川光次郎著
●富の壓制　定價拾貳錢　郵稅貳錢
著者が現社會に對する万腔の悲憤と慷慨とを爆發せしめしもの、沈痛放膽の大文字、痛快の極！。

村井知至著
●社會主義　定價拾五錢　郵稅貳錢
最も分り易く、最も明白に、社會とは何ぞやらん事を論じたるもの。

矢野文雄、安部磯雄共
●社會講演　定價拾錢　郵稅貳錢
矢野龍溪、安部教授兩氏が勞働問題の大演說を集錄したり。

以上申込　東京神田三崎町三ノ一　社會主義圖書部

安部磯雄著
●社會主義論　定價拾錢　郵稅貳錢
通俗にして面白く、一讀直ちに、社會主義の綱領に通せしめんが爲めの著なり。
社會主義に就て一通りの智識を得んとする者は、此の『社會主義論』と、片山氏の『我社會主義』と、村井氏の『社會主義』と、西川氏の『富の壓制』及び『社會黨』を先づ併讀やる可し。

毎月二回、三日、十八日發行
●雜誌『社會主義』
定價一部七錢三ヶ月分四拾錢、郵券代用一割增
日本に於ける唯一の社會主義雜誌にして、明治三十年創刊以來茲に止に第七年、日本に於ける社會主義の言論、活動を知らんとする先覺の志士は、必ず此雜誌を讀まざる可からず。

斯學の要領は流暢明瞭な文章を以て社會問題に關する者は必ず一讀を要す　全壹冊　定價金八拾五錢　郵稅拾貳錢
◎岸本能武太先生著　◎第三版發行
社會學

又生存競爭の社會主義は放奇拔の筆を揮つて失消せられた壯快の大文字也榮枯變遷を詳論し社會全體を詳說し　全壹冊　定價金貳拾五錢　郵稅金四錢
◎高橋五郎先生著　◎第二版發行
社會主義活辯

本書は流暢明瞭な文章を以て社會問題に關する者は必ず一讀を要す　全壹冊　定價金貳拾五錢　郵稅拾貳錢
◎矢野文雄先生著　◎第十七版發行
新社會

前書を通俗に改組し名人の書き直せし者也　全壹冊　定價金貳拾五錢　郵稅金四錢
◎矢野文雄先生著　◎第二版發行
通俗新社會

本書は新組織及び人民の幸福に關する物語にして社會問題に　全壹冊　定價金四拾錢　郵稅金四錢
◎矢野文雄先生著　◎第十七版發行
新社會

遷照し現社會の理數を明示せる者也　全壹冊　定價金四拾五錢　郵稅金八錢
◎懲振假名附
本書は現今歐米の先覺者の有樣と諸學者の說とを參照し變遷

東京市京橋區銀座二丁目壹番地　**社會式株書圖本日大　發賣**